

豊かな心を育む

道德教育



よくわかる

道德教育の充実と道德科の授業改善

- 学校教育全体で道德教育を推進するには、どうすればよいのだろう。
- 道德教育を核にしたカリキュラム・マネジメントとは、どうすればよいのだろう。
- 1時間の道德科の授業を構想するとき、大切なことは何だろう。
- 道德科における「指導と評価の一体化」は、どのように考えればよいのだろう。

目次

1	「特別の教科 道徳」指導の手引	1
①	「道徳教育」と「特別の教科 道徳（道徳科）」	
②	「指導の意図」を明確にした授業づくり	
③	「特別の教科 道徳（道徳科）」の評価	
2	実践事例	
(1)	小学校	
①	低学年・第2学年	6
	内容項目：B-(6) 親切、思いやり	
	教材名：「ぐみの木と小とり」（東京書籍「新編 新しいどうとく2」）	
②	中学年・第3学年	10
	内容項目：B-(9) 友情、信頼	
	教材名：「なかよしだから」（東京書籍「新編 新しいどうとく3」）	
③	高学年・第5学年	14
	内容項目：B-(7) 親切、思いやり	
	教材名：「くずれ落ちただんボール箱」（東京書籍「新編 新しい道徳5」）	
(2)	中学校	
①	第1学年	18
	内容項目：D-(19) 生命の尊さ	
	教材名：「ばあば」（日本文教出版「中学道徳 あすを生きる①」）	
②	第2学年	22
	内容項目：B-(6) 思いやり、感謝	
	教材名：「夜のくだもの屋」（日本文教出版「中学道徳 あすを生きる②」）	
③	第3学年	26
	内容項目：C-(16) 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度	
	教材名：「稲むらの火」（日本文教出版「中学道徳 あすを生きる③」）	
3	道徳教育パワーアップ実践校 実践事例紹介	
(1)	岐阜市立白山小学校	32
	<研究主題> 自己を見つめ、よりよい生き方について考える道徳教育の在り方	
	・研究内容1 道徳科の授業の単位時間の在り方	
	・研究内容2 全教育活動で行う道徳教育の在り方	
(2)	関市立津保川中学校	36
	<研究主題> 自己を見つめ、よりよい生き方をめざして実践しようとする生徒の育成	
	・研究内容1 道徳科の授業を要とし、全教育活動を通して行う道徳教育の推進	
	・研究内容2 自己を見つめ、自己の生き方について考えを深める授業展開の工夫	
	・研究内容3 地域・家庭と連携し、道徳性を育む活動の充実	
■	情報提供	
(1)	文部科学省「道徳教育アーカイブ」	40
(2)	岐阜県教育委員会HP「ぎふっこ学び応援サイト」-「豊かな心を育む」	
(3)	岐阜県道徳教育振興会議「1家庭1ボランティア」運動	

1 「特別の教科 道徳」 指導の手引

Q 学校における「道徳教育」とは、
どのようなものだろうか。



Q 「特別の教科 道徳(道徳科)」の
学習を通して、どのような力を育
んでいくのだろうか。

Q 「指導の意図」を明確にして授業
を構想するには、どうすればよい
のだろうか。



Q 「特別の教科 道徳(道徳科)」で
は、何を評価するのだろうか。

①「**道徳教育**」と「**特別の教科 道徳(道徳科)**」

Q 学校における「**道徳教育**」とは、どのようなものだろうか。

A **道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育**

道徳教育の目標

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の（人間としての）生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共に**よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う**ことを目標とする。

小・中学校学習指導要領「第1章総則」 ※（ ）内は中学校

学校の教育活動全体を通じて

よりよく生きるための基盤となる**道徳性**を養う

■各教科、総合的な学習の時間、特別活動

■日常の生徒指導等



要

■道徳科の学習

- 計画的・発展的に
- 補充・深化・統合
- 道徳的価値の理解



内面的資質(心)としての道徳性の育成

道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行います。道徳科の学習は、**内面的資質(心)としての道徳性を育成する学習**です。



Q 「**特別の教科 道徳(道徳科)**」の学習を通して、どのような力を育てていくのだろうか。

A **道徳科の学習**

「**特別の教科 道徳(道徳科)**」の目標

よりよく生きるための基盤となる**道徳性を養う**ため、**道徳的諸価値**についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を通して、**道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる**。

小・中学校学習指導要領「第3章 特別の教科 道徳」 ※（ ）内は中学校

道徳科の学習を通して、

- ①道徳的諸価値を理解する
- ②自己を見つめる
- ③物事を(広い視野から)多面的・多角的に考える
- ④自己の(人間としての)生き方についての考えを深める

道徳性を育てる。

- 道徳的判斷力**
・善悪を判断する能力
- 道徳的心情**
・道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情
- 道徳的実践意欲**
・道徳的判斷力や道徳的心情を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志の働き
- 道徳的態**度
・具体的な道徳的行為への身構え



道徳教育の目標を達成するために指導すべき内容項目（小学校：低19、中20、高22、中学校：22）について、週1時間（年間35時間（小1は年間34時間））の授業で、計画的・発展的に指導します。

②「指導の意図」を明確にした授業づくり

Q 「指導の意図」を明確にして授業を構想するにはどうすればよいのだろうか。

A

例えば、「B 友情、信頼」において

①価値の分析

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

第1学年及び第2学年の指導の観点

(9)「友達と仲よくし、助け合うこと。」を基に…
友達と一緒に活動して楽しかったことや友達と助け合っ
てよかったことを考え、友達と仲よく助け合っ
ていこうとする心情を育てること。

各教科等、様々な場面で、この視点で友情、信頼に係る指導を行う。

②実態と要因の分析

「価値の分析」を基にした児童生徒の実態と授業者の願いから、授業の要点を明らかにします。

児童生徒の実態と要因

よさ

困っている友達がいると進んで助けようとしている。

課題

一緒に遊んでいた友達を置いて、自分の都合を優先してしまい、友達を悲しい思いにさせてしまうことがある。

要因

幼児期の自己中心性から十分脱しておらず、友達の立場を理解することが難しい。

実態から育成したいこと

友達のことを考えて、自分から仲よくし、助け合っ
ていこうとする心情を育てたい。

③教材の分析

考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討します。

教材「二わのことり」

やまがらの涙の意味を深く考えさせることで、友達同士、仲よく助け合うことのよさに気付くことができるようにしたい。

ねらい

友達のことを考えて行動すると、自分も相手も明るく楽しく生活できることに気づき、友達と仲よく、助け合っ
ていこうとする心情を育てる。

指導方法の工夫

・発問の工夫 ・役割演技 ・ワークシートなど



☆中心発問

目に涙を浮かべたやまがらさんを見て、みそさざいさんはどんな気持ちになったでしょう。

指導の意図の明確化

③「特別の教科 道徳(道徳科)」の評価

Q 「特別の教科 道徳(道徳科)」では、何を評価するのだろうか。

A

道徳科の評価 (評価の公的な文書である「指導要録」の場合)

道徳科における評価は、道徳科の授業を行った結果として見られた**学習状況や道徳性に係る成長の様子**を評価して記載します。



挨拶の姿や友達との関わりなど普段の学校生活で見られる行動については、指導要録の上では、「行動の記録」として記載します。



道徳科の授業で評価すること

〈育成するもの〉 道徳性

目に見えない内面的資質

- 道徳的判断力
- 道徳的心情
- 道徳的実践意欲
- 道徳的態度



※道徳性を養うことを目指しますが、**道徳性は目に見えないため、養われたか否かは、容易に判断できません。**
※授業の指導のねらいと評価の視点は異なります。

〈評価するもの〉

道徳性につながるような目に見える**学びの姿**

- 多面的・多角的な見方へと発展しているか
- 自分自身との関わりの中で深めているか

○多面的・多角的な見方へと発展している例

- ・ねらいとする道徳的価値の様々な面を考えている。
- ・道徳的価値を支える様々な根拠を考えている。
- ・様々な登場人物の立場で考えている。
- ・自分の考えと友達の考えを比べて考えている。
- ・時間の経過とともに変化する気持ちを考えている。
- ・人間の強さや弱さ等を捉えて考えている。など

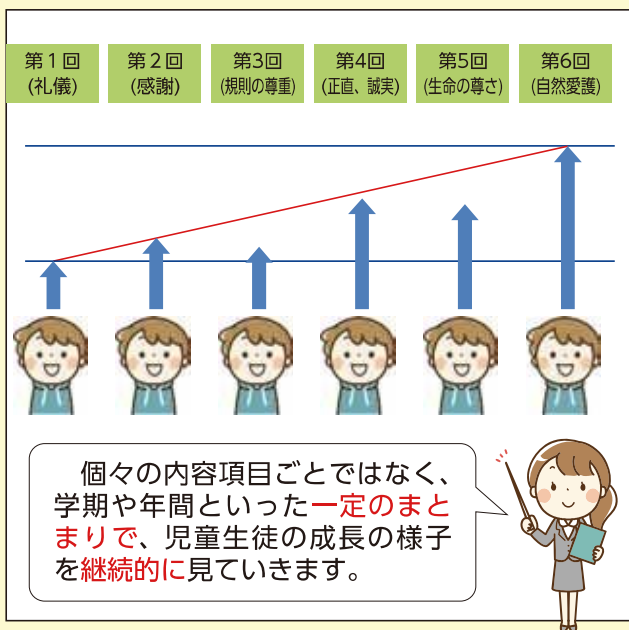
○自分自身との関わりの中で深めている例

- ・教材の登場人物に自分自身を置き換えて考えている。
- ・教材の問題点等を自分のこととして受け止めて考えている。
- ・日常生活や学校生活を想起しながら考えている。
- ・自分の生活を見つめ、振り返りながら考えている。
- ・自分だったらどうするかなどを考えている。など



道徳科の授業での発言や記述等を通して、**目に見える学びの姿**を評価します。

大きくくりなまとまりを踏まえた評価



★道徳科の評価のポイント★

- ①数値による評価ではなく、**記述式**です。
- ②**他の児童生徒との比較ではなく**、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて、認め励ましていく**個人内評価**です。
- ③児童生徒が、**「より多面的・多角的な見方へと発展しているか」「道徳的理解を自分自身との関わりの中で深めているか」といった点を重視**します。
- ④個々の内容項目ごとではなく、学期や年間などの**大きくくりなまとまり**を踏まえて評価をします。
- ⑤調査書に記載して、**入学者選抜の可否判定に活用**することはありません。

2 実践事例

(1) 小学校

- ① **低学年・第2学年** 6
内容項目：B-(6) 親切、思いやり
教材名：「ぐみの木と小とり」
(東京書籍「新編 新しいどうとく2」)
- ② **中学年・第3学年**10
内容項目：B-(9) 友情、信頼
教材名：「なかよしだから」
(東京書籍「新編 新しいどうとく3」)
- ③ **高学年・第5学年**14
内容項目：B-(7) 親切、思いやり
教材名：「くずれ落ちただんボール箱」
(東京書籍「新編 新しい道徳5」)

(2) 中学校

- ① **第1学年**18
内容項目：D-(19) 生命の尊さ
教材名：「ばあば」
(日本文教出版「中学道徳 あすを生きる①」)
- ② **第2学年**22
内容項目：B-(6) 思いやり、感謝
教材名：「夜のくだもの屋」
(日本文教出版「中学道徳 あすを生きる②」)
- ③ **第3学年**26
内容項目：C-(16) 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度
教材名：「稲むらの火」
(日本文教出版「中学道徳 あすを生きる③」)

主題構成表

■内容項目

B-(6) 親切、思いやり
身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること。

■価値の分析

- ・望ましい人間関係を築く上で、相手の気持ちや立場を考え、思いやりの心をもって親切にすることに関する内容項目である。
- ・思いやりとは、相手の心の中を押し量って思いを察し、相手の立場を考えたり、想像したりすることである。
- ・よりより人間関係を築くためには相手に対する思いやりは不可欠である。身近な人に広く目を向けて、温かい心で接し、親切にすることの大切さに気付かせていくことが大切である。
- ・身近な人との関わりの中で、相手のことを考え、優しく接していく経験を積むことや、相手の喜びが自分の喜びとして受け入れられように、相手のことを親身になって考えられるようにすることが大切である。

■内容項目から見た児童の実態

- ・困っている仲間に対して、仲のよい子には、進んで声をかけたり手伝ったりする。
- ・困っている子がいても、あまり親しくない子にはどのように声をかけてよいか分らず、勇気が出ないため、見て見ぬふりをしてしまう。
- ・親切にしたいという気持ちはあっても、相手のことを考え、優しく接する行動をすることに至らない。

■要因

- ・親切にすることは、大切だと分かっているが、相手の困り感に対してどのように接したらよいのか、どのような行動をしたらよいのか分からない。
- ・相手の考えや気持ちを想像する経験が少ない。
- ・発達的特質から自分中心の考え方をすることが多く、褒められることを目的とした親切になりがちである。

■教材の分析

- ・ぐみの木の親切な行動の温かさに触れた小鳥は、ぐみの木の代わりに、嵐の中でも、りすにぐみの実を届けようとする。相手のことを思い、親切にすることの大切さを考えられる教材である。
- ・涙を浮かべて喜ぶりすを見た小鳥の気持ちを考えることで、相手に親切にすることのよさを感じられるようにしたい。
- ・嵐の中で、じっと考える場面では、相手のことを考え、親切にしようとする小鳥の心情を考えることを通して、道徳的価値を深める。
- ・りすやぐみの木に感謝された時の小鳥の気持ちを考えることを通して、相手のことを考え、相手の喜びを自分の喜びとして受け入れて、身近な人にも温かい心で優しく接していく心情を育てていきたい。

■ねらい

温かい心で親切にすると、相手もうれしい気持ちになることに気づき、相手のことを考えてやさしく接しようとする心情を育てる。

■展開の構想

- ・ぐみの木の親切な行動の温かさに触れた小鳥は、相手のことを思い、親切にすることの大切さに気付く。
- ・涙を目にいっぱいためているりすの様子から、明日もりすのところへぐみの実を届けに行こうという気持ちを表出できるように、役割演技をする。
- ・やみそうもない嵐の中、りすのところへたどり着けるかどうか分からない不安な小鳥の気持ちに共感し、相手のことを考えて行動するよさに気付く。
- ・りすとぐみの木の話聞いて、小鳥はどんな気持ちで飛び立ったのか考える。
- ・身近にいる人に広く目を向け、自己を見つめる。

■基本発問 (◎中心発問)

- 「わたしの実でよかったら、どうぞお食べください」と言われ、ぐみの実を食べた小鳥はどんな気持ちだったでしょう。
- 涙を目にいっぱいためて「おかげで だいぶよくなりました」と言っているりすを見て、小鳥はどんな気持ちになったでしょう。
- ◎やみそうもない嵐の中、「じっと考えて」いた小鳥は、何を考えていたのでしょうか。
- りすとぐみの木の話聞いて、小鳥はどんな気持ちで飛び立ったのでしょうか。
- 学校や家でのことを思い出し、近くにいる人が困っていたらどうするとよいと思いますか。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目

B-(6) 親切、思いやり
身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること。

【内容項目について大切にしたいこと】

互いが相手に対して思いやりの心をもって接する大切さを考え、相手の考えや気持ちに気付くことや、立場を自分に置き換えて推し量り、身近な人に温かい心で接していこうとする心情を育てること。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基にした児童生徒の実態と授業者の願いから、指導の要点を明らかにします。



【児童の実態と要因】

- よさ：進んで声をかけたり、助けようと手伝ったりする姿が見られる。
- 課題：親しくない仲間には、どのように声をかけてよいか分からなかったり、見て見ぬふりをしたりする姿が見られる。
- 要因：先生や友達に褒めてもらいたいからという目的から親切にする。

【実態から育成したいこと】

身近な人との関わりの中から、温かい心で親切にすると、相手もうれしい気持ちになることに気づき、相手のことを考えてやさしく接しようとする心情。

ポイント

3 「教材の分析」

考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討します。

●実態と要因から中心的に取り上げたい場面●

小鳥が、嵐の中で、じっと考えていた場面。

あ ら す じ

- ・ぐみの木は、お腹を空かせた小鳥に実を分け、最近姿を見せない友達のりすを心配していることを小鳥に話す。
- ・小鳥は、ぐみの実をりすのもとへ持って行くと、病気で寝ていたりすは、ぐみの実を食べて少し元気を取り戻し、ぐみの木の心配を聞いて、小鳥に感謝する。
- ・小鳥は次の日もぐみの実を届け、りすは回復していく。嵐の日も小鳥は迷いながらも強い雨風の中、りすのもとへぐみの実を届ける。
- ・嵐がやみ、りすは元気になる。ぐみの木は小鳥の親切を忘れないと伝え、小鳥はぐみの木に別れを告げて飛び立つ。

ポイント

4 「考え、議論したいこと」

「価値」「実態と要因」「教材」の分析を受け、**考え、議論したいこと**を明確にします。

●考え、議論したいこと●

親切にする行動の大きさよりも、相手の考えや気持ちを考え、思いやる心そのものの大切さについて。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】

温かい心で親切にすると、相手もうれしい気持ちになることに気づき、相手のことを考えてやさしく接しようとする心情を育てる。



6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫

- ・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など



本時の展開

基本発問と予想される児童の反応		指導・援助
導入	1 価値に関わる自分の行動や考えを振り返る。 ○これまでに、人に親切したり、親切にされたりしたことはありますか。また、どんな時ですか。 ・一人で遊んでいる時 ・欠席した時 ・困っている時に優しく声をかけてもらった	・日常生活の中で、困っている友達に対して、これまでの自分の友達との関わり方について想起させ、本時の価値への方向付けをする。
	2 範読を聞き、話し合う。 ○「わたしの実でよかったら、どうぞお食べください」と言われ、ぐみの実を食べた小鳥はどんな気持ちだったでしょう。 ・ぐみの木さん、ありがとう。 ・とってもおいしいよ。 ・お腹がすいて困っていたから、嬉しいよ。 ○涙を目にいっぱいためて「おかげで だいぶ よくなりました」と言っているりすを見て、小鳥はどんな気持ちになったでしょう。【役割演技】 ・喜んでくれてよかった。早く元気になってね。 ・明日も持って行ってあげたいな。 ・りすが喜んでいるのを見て小鳥がうれしそう。 ◎やみそうもない嵐の中、「じっと考えて」いた小鳥は、何を考えていたのでしょうか。 ・嵐の中を飛ぶのは、怖いから、嵐がやむまで待ってからにしようかな。 ・ぐみの木さんにたのまれているからなあ。 ・りすさん、一人ぼっちでさみしいだろうな。僕が来ることを待っているかもしれないな。 ・ぐみの実は僕しか届けられないんだ。何としても届けなきゃ。 【深めるための補助発問】 小鳥は、どんな気持ちで嵐の中、力を振り絞って飛び続けたのでしょうか。 ・りすさん、待っていてね。今行くよ。 ・辛いけどりすさんのために、がんばろう。 ○りすとぐみの木の話聞いて、小鳥はどんな気持ちで飛び立ったのでしょうか。 ・りすさん、元気になってくれてうれしいな。 ・ぐみの木さんも喜んでくれてうれしいな。	・あらすじや登場人物について簡単に説明をしながら教材の範読をする。範読の途中では、登場人物が分かりやすいように、ペープサートで示し、視点（主人公のすてきなところ等）をもって聞けるようにする。 ・りすの様子から「明日もりすのところへぐみの実を届けに行こう」という気持ちを表出するために役割演技をする。 【役割演技】 ・教師対全員で役割演技を行う。 ・小鳥：児童 りす：教師 ＜教師（りす役）＞ 「おかげで だいぶ よくなりました。」 ＜児童（小鳥役）＞ ・「早く元気になってほしいな。明日もぐみの実をりすさんへもって届けるね。」 ・「よくなってよかった。早く元気になってね。」
展開 前段	3 本時の学習を振り返る。 ○学校や家でのことを思い出し、近くにいる人が困っていたらどうするとよいと思いますか。 ・友達が給食の片付けで重いものを持っていた時、一緒に持ったら、ありがとうと言ってくれてうれしかった。 ・妹が急に泣いた時に、優しく声をかけたら、泣き止んでくれてよかった。	・演技を見ている児童に対して、演じている人の言葉や表情に注目するよう促す。 ・「深めるための補助発問」では、はじめぐみの木から頼まれてりすのところへ行った小鳥が、自らの決意で動き出す気持ちの変化に気付くことができるようにする。 ・相手の気持ちや立場に立って考えた小鳥が決断したときの思いの表れに、「力を振り絞って飛び続けた」視点に気付くことができるように、板書の配置を考え、視覚からも捉えられるようにする。 【評価の視点】 相手のことを考えて自らの決意で優しく接することの大切さに気付いている。 ①
	4 教師の説話を聞く。	・友達だけでなく、幼い人や高齢者の方など、身近にいる人に広く目を向けられるよう、日常の写真や場面提示し、相手のことを考え、優しく接していた児童の思いを紹介する。 【評価の視点】 身近で大切にしてきた親切、思いやりについてこれまでの経験を振り返り、自己を見つめている。 ②
終末		・温かい心で親切にされた嬉しい気持ちを紹介し、身近な人へ広げていきたい思いについて話す。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

温かい心で親切にすると、相手もうれしい気持ちになることに気付き、相手のことを考えてやさしく接しようとする心情を育てる。

評価

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

ポイント

【評価の視点】

- 1 相手のことを考えて自らの決意で優しく接することの大切さに気付いている。

【評価の視点】

- 2 身近で大切にしてきた親切、思いやりについてこれまでの経験を振り返り、自己を見つめている。

2 「児童生徒の姿・発言」を想定

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

ポイント

想定する「具体的な学習状況」

- ① 小鳥はもっとりすが元気になるってほしいと思い、自分にできる親切を考え、自分の思いで嵐の中でもぐみの実をりすのところへ持って行くことで、りすが元気がなったことをぐみの木へ報告できて嬉しいな。
- ② 相手のことを考え自分の思いで優しく接していくと、親切が広がっていくな。親切は何かするだけではなく、自分の親切が誰かにつながるな。

3 「評価の視点」に基づいた指導の工夫

【評価の視点】に基づいた、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

ポイント

発問の工夫

①

「道徳的価値の意義や大切さの理解」

ができるようにするために…

発問「やみそうもない嵐の中、『じっと考えて』いた小鳥は、何を考えていたのでしょうか。」
・りすのところに辿り着けるか心配な気持ちや、最初はぐみの木から頼まれたからりすのところへ行っていた小鳥の気持ちの変化したことを考えることで、小鳥自身がりすに早く元気になるってほしいという思いに溢れていることに気付くことができるようにする。

深めるための補助発問

「小鳥は、どんな気持ちで嵐の中、力を振り絞って飛び続けたのでしょうか。」
・相手のことや気持ちを考えた小鳥が決断した時の思いの表れに気付くことができるように、板書の配置を考え、視覚的に捉えられるようにする。

学習活動の工夫

②

「自己を見つめること」

ができるようにするために…

本時の学びと自分のこれまでの生活を関わらせながら振り返る。

・学校や家でのことを思い出し、近くにいる人が困っていたらどうするとよいと思いますか。

指導

主題構成表

■内容項目

B-(9) 友情、信頼
友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。

■価値の分析

- ・友達との間に信頼と切磋琢磨の精神をもつことに関する内容項目である。
- ・児童にとって、友達関係は最も重要な人間関係の一つであり、よりよい友達関係を築くことは、学校生活の充実にも繋がる。
- ・3年生の段階では、活動範囲の広がりによって友達関係も広がってくる。その中で、気の合う友達同士で仲間をつくって自分たちの世界を確保し、楽しもうとする傾向がある。しかし、その中で自分の利害にこだわることで、友達とトラブルを引き起こすことも少なくない。
- ・友達とのよりよい関係の在り方を考えることを通して、お互いのことを理解することができる健全な友達関係を育成することが大切である。

■内容項目から見た児童の実態

- ・学級遊びや学級の活動を大切に、みんなで楽しく遊ぶとすることができる。
- ・嫌なことがあっても、自分で相手に気持ちを伝えたり忠告したりすることができず、教師に伝えることでトラブルを解決しようとしたり、嫌な気持ちを解消したりしようとすることがある。
- ・自分の言動に対して忠告をされたり、改めるように求められたりすると、不機嫌な表情になったり、相手に嫌な思いをさせるような言動を取ったりすることがある。

■要因

- ・友達は、一緒に遊ぶと楽しい存在であるということを理解している。
- ・教師に伝えた方が問題を早く解決できるだろうと考えたり、友達との関係が崩れることを心配したりしていることもある。
- ・友達に自分の思いを伝えたり、相手の気持ちを聞いたりすることの大切さを感じた経験が少ない。

■教材の分析

- ・主人公の「ぼく」が、なかよしの実さんから、忘れた宿題の答えを教えてもらおうとすることをきっかけに、友達とのよりよい関係について考え、その価値観を深められる教材である。
- ・やり忘れた宿題の答えを教えてもらおうと「ぼく」が実さんに頼んだ際に、思いがけない返事が返ってくる場面で、「ぼく」の心の中を考えることを通して、「ぼく」がもつ友情に対する考え方を理解できるようにする。
- ・『なかよしだから、なお教えられないよ。』と言った実さんの気持ちについて考えることを通して、友達とのよりよい関係の在り方に気づき、友達のことを互いに理解してよりよい友達関係を築いていきたいという心情を育てていきたい。

■ねらい

よりよい友達関係を築くためには、相手のことを考えて伝えるべきことがあることに気づき、友達のことをよく考えて、よりよい関係を築いていきたいという心情を育てる。

■展開の構想

- ・忘れた宿題を実さんに教えてもらおうとした時の「ぼく」の心情について共感的に考える。
- ・『なかよしだから、なお教えられないよ。』と言われた「ぼく」の気持ちやその言葉を伝えた実さんの気持ちを考えることで、よりよい友達との関係について考える。
- ・実さんに言われた言葉の真意を捉えて、翌日、実さんにかかる言葉を考える。
- ・友達とのよりよい関係の在り方について、自己を見つめる。

■基本発問 (◎中心発問)

- 算数の宿題を実さんに教えてもらおうとした時、「ぼく」はどんな気持ちだったのでしょうか。
- 『なかよしだから、なお教えられないよ。』と言われて、なぜ「ぼく」はかっとしたのでしょうか。
- ◎家に帰った「ぼく」は、実さんが言ったことについて、どんなことを考えていたのでしょうか。
- 次の日、「ぼく」は実さんにどのようなことを話すのでしょうか。
- あなたは友達と「なかよし」でいるためにどんなことが大切だと思いますか。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目

B-（9）友情、信頼
友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。

【内容項目について大切にしたいこと】

友達とよりよい関係を築くためには、友達とのよりよい関係の在り方について考え、友達のことを互いに理解しようとする心情を育てること。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基にした児童生徒の実態と授業者の願いから、指導の要点を明らかにします。



【児童の実態と要因】

- よさ：みんなで楽しく遊ぼうとすることができる。
- 課題：友達との間で何か困ったことがあった際に、自分たちの気持ちを伝え合いながら解決していこうとする気持ちが弱く、その解決を教師に委ねる傾向がある。
- 要因：友達との関係の崩れを心配し、その解決を教師に委ねた方がよいと考える。また、自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを聞いたりすることの大切さを感じた経験が少ない。

【実態から育成したいこと】

友達とよりよい関係を築くためには、自分たちの気持ちを伝え合いながら、友達のことをお互いに理解することが大切であることに気づき、よりよい友達関係を築いていきたいと思う心情。

ポイント

3 「教材の分析」

考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討します。

●実態と要因から中心的に取り上げたい場面●

『なかよしだから、なお教えられないよ。』と実さんが言った場面

あ ら す じ

- ・「ぼく」は、朝、学校につくと、算数の宿題をするのを忘れていたことに気付く。
- ・「ぼく」は、昨日一緒にボール投げをして、カーブの投げ方を教えてあげたとてもなかよしの実さんに教えてもらおうと考え、声をかけた。
- ・「ぼく」の頼みに、実さんは『なかよしだから、なお教えられないよ』と断る。
- ・実さんの言葉に対してかっとなりながらも、実さんの言葉の真意について考える「ぼく」である。

ポイント

4 「考え、議論したいこと」

「価値」「実態と要因」「教材」の分析を受け、**考え、議論したいこと**を明確にします。

●考え、議論したいこと●

「なかよし」だから教えてくれるのが当たり前と考える「ぼく」が、『なかよしだから、なお教えられないよ。』と答えた実さんの言葉から、友達とのよりよい関係の在り方について

5 「ねらい」の設定

【ねらい】

よりよい友達関係を築くためには、相手のことを考えて伝えるべきことがあることに気づき、友達のことをよく考えて、よりよい関係を築いていきたいという心情を育てる。



6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫

- ・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など



本時の展開

基本発問と予想される児童の反応		指導・援助
導入	1 価値に関わる自分の行動や考えを振り返る。 ○「友達との関係」で、どのようなことを大切にしていますか。 ・友達が嫌な気持ちにならないように気を付けています。 ・自分だけが楽しいのではなく、友達も同じように楽しくなるようにしたいです。	<ul style="list-style-type: none"> ・日常にある「友達との関係」について考えることで、本時、考えていく価値への導入を図る。 *事前にアンケートを実施し、本時、全体で確認する。
	2 範読を聞き、話し合う。 ○算数の宿題を実さんに教えてもらおうとした時、「ぼく」はどんな気持ちだったでしょうか。 ・実さんと「ぼく」は、なかよしだから絶対に助けてくれるはずだ。 ・昨日は「ぼく」がカーブの投げ方を教えてあげたのだから、今度は「ぼく」が算数を教えてもらおう。 ○『なかよしだから、なお教えられないよ。』と言われて、なぜ「ぼく」はかっとしたのでしょうか。 ・自分だけ教えて、実さんが教えてくれないことに不満を感じたから。 ・なかよしの友達だから教えてくれると思いついていたから。 ・なかよしのはずなのに、裏切られたように感じたから。 ◎家に帰った「ぼく」は、実さんが言ったことについて、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・実さんのことだから何か理由があるはずだ。実さんにひどいことを言ってしまったなあ。 ・実さんは「ぼく」のことを考えて、教えてくれなかったのかもしれない。『なかよしだから…』とはそういう意味か。	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が教材の場面や登場人物の関係性について共通の認識をもてるように、説明をする。 ・「なかよしならば困っているときに助けてくれるだろう」という、「ぼく」のもつ友情観を理解できるようにするために、『「ぼく」の気持ち分かりますか。』と問いかけ、「ぼく」に共感的になって考えることができるようにする。 ・『なかよしだから、なお教えられないよ。』と答えた実さんの気持ちを理解できず、感情的になっている「ぼく」の気持ちについて理解できるようにする。
展開	【深めるための補助発問】 実さんは、「なかよしだから、なお教えられないよ。」と答えたのはなぜでしょうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・「深めるための補助発問」では、実さんの気持ちを考えることで、よりよい友達関係を築く上で大切な実さんの友情観について考えることができるようにする。 ・実さんの『なかよしだから、なお教えられないよ。』という言葉に込められている友情に対する理解を深めるために、資料にはないその先について、「どのようなことを話すか。」という視点で考えることができるようにする。
	<ul style="list-style-type: none"> ・なかよしの「ぼく」のためだから助けてあげたい気持ちはあるけれど、「ぼく」のためにはならないから。 ・本当の友達は相手のためにならないことをしてはいけないと思ったから。 	
前段	○次の日、「ぼく」は実さんにどのようなことを話すでしょうか。 ・『実さん、昨日はごめんね。ぼくは、「なかよし」だから何でも教えてあげることが大切だと思っていた。でも、相手のことを考えて、よくないことは「よくない」と伝える事が大切だとわかったよ。宿題はやっぱり自分でやらないといけないね。これからもなかよしでいてね。』	【評価の視点】 よりよい友達関係を築くためには、相手のことをよく考えて行動をすることが大切であると気付いている。 ①
展開後段	3 本時の学習を振り返る。 ○あなたは友達と「なかよし」でいるために、どんなことが大切だと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・導入で紹介した「友達との関係」で大切にしていることと、本時学習したことを比較しながら自分のことを振り返ることができるように促す。
	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで、相手のいいようにしてあげることが「なかよし」のためには大切だと思っていました。しかし、今日、「なかよし」でいるためには、相手のためになるかをよく考えて、よくないことはしっかりと伝えてあげることも大切だと思いました。 	
終末	4 教師の説話を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・友達とよりよい関係を築くためには、相手のことをよく考えた言動をとることが大切であることについて話す。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

よりよい友達関係を築くためには、相手のことを考えて伝えるべきことがあることに気づき、友達のことをよく考えてよりよい関係を築いていきたいという心情を育てる。

評価

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

ポイント

①

【評価の視点】
よりよい友達関係を築くためには、相手のことをよく考えて行動することが大切であると気付いている。

②

【評価の視点】
友達との関わりについて、これまでの自分の生活を振り返りながら、これから大切にしたいことについて考えている。

2 「児童生徒の姿・発言」を想定

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

ポイント

想定する「具体的な学習状況」

- ① 「なかよし」というのは、相手が望むことをしてあげるだけではないのだ。相手のことを考えてよくないことは「よくないよ。」と伝えることが大切だ。
- ② 私は、友達がうれしそうな顔をしていたら私もうれしい気持ちになります。でも、今日の道徳の勉強で、本当の「なかよし」になるためには、友達のためになるかどうかをよく考えて生活したいと思いました。

3 「評価の視点」に基づいた指導の工夫

【評価の視点】に基づいた、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

ポイント

発問の工夫

①

【道徳的価値の意義や大切さの理解】

ができるようにするために…

発問「家に帰った「ぼく」は、実さんが言ったことについて、どんなことを考えていたのでしょうか。」

・学校では感情的に振る舞いながらも、なかよしの実さんの『なかよしだから、なお教えられないよ。』という言葉が気に入り、自分と実さんの友達に対する考え方の違いについて考えられるようにする。

深めるための補助発問

「実さんは、『なかよしだから、なお教えられないよ。』と答えたのはなぜでしょうか。」
・『なかよしだから、なお教えられないよ。』と言った実さんの気持ちについて捉え、よりよい友達関係を築くために大切なことを理解する。

学習活動の工夫

②

【自己を見つめること】

ができるようにするために…

本時の学びと自分のこれまでの生活を関わらせながら振り返る。

・友達と「なかよし」でいるために大切なことは何かについて問い、実さんの言葉から考えたよりよい友達関係の在り方について、これまでの「友達との関係」を振り返りながら自己を見つめることができるようにする。

指導

主題構成表

■内容項目

B-(7) 親切、思いやり
誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にすること。

■価値の分析

- ・よりよい人間関係を築く上で求められる基本的姿勢として、相手に対する思いやりの心を持ち親切にすることに関する内容項目である。
- ・思いやりとは、相手の気持ちや立場を自分のことに置き換えて推し量り、相手に対してよかれと思う気持ちを相手に向けることである。
- ・相手の立場を考えたり相手の気持ちを想像したりすることは、単に手を差し伸べるだけではなく、時には相手のことを考えて温かく見守ることも親切な行為の表れである。
- ・人間関係の深さの違いや意見の相違などを乗り越え、思いやりの心とそれが伴った親切な行為を、児童が接するすべての人に広げていくために、児童が多様な人々と触れ合い、助け合って何かをするような機会を増やすことが大切である。

■内容項目から見た児童の実態

- ・困っている仲間を見付けると、進んで助けようとする姿が多く見られる。
- ・仲間に対して、よかれと思ひ呼びかけや注意の声かけをするが、強めの口調や言葉遣いになることがある。
- ・ほめてもらいたい気持ちが強いあまり、相手が望んでいないのに手助けしようと手を出してしまうことがある。

■要因

- ・困っている仲間を助けることは、相手にとって望ましいことだと考えている。
- ・一方で、自分の考えや思いを伝えたいあまり、仲間の気持ちや立場について、十分に考えられていない。
- ・そのため、自分がよいと思ったことが親切だと認識しており、相手の立場や気持ちを考えるなど、場合に依じた行為こそが親切であるということに気付いていない。

■教材の分析

- ・おばあさんの困った様子を見かねた主人公が親切にしたはずのことで、店員から一方的に叱られ、やるせない気持ちになる。後日謝罪と感謝を受けたことにより晴れやかな心になった主人公の気持ちを考えることを通して、様々な立場にある人たちが、お互いを思いやることや親切にすることのよさについて考えを深めることのできる教材である。
- ・「いいえ、いいんです…」と答えた時の主人公の気持ちを通して、自分の気持ちがうまく伝わらないもどかしさについて考えさせ、よりよい人間関係を築くためには何が大切なのかを考える。
- ・店員からの手紙を通して、「思いやり、親切とは何か」について考え、相手の立場に立って行動するなど、今後の生活においてよりよい人間関係を構築しようとする態度について共感できるようにする。

■ねらい

思いやりとは、相手の立場や気持ちを考えたり想像したりすることが大切であることに気づき、思いやりの心をもって親切な行為に努めようとする態度を育てる。

■展開の構想

- ・自分の考える「親切、思いやり」について振り返る。
- ・店員に誤解され一方的に怒られた気持ちと、おばあさんに感謝されたときの気持ちとの間で葛藤する主人公の思いについて考える。
- ・学校に届いた手紙を聞いた主人公の思いを通して、親切や思いやりで大切にしたいことを考える。
- ・自分たちのこれまでの行為行動を思い出し、相手にうまく伝わったことや伝わらなかったことを振り返り、どうすることが、お互いにとってよい結果につながるのかを考え、今後に生かそうとする。

■基本発問 (◎中心発問)

- 親切、思いやりと聞いて、どんなことを思い浮かべますか。
- だんボール箱の片付けを手伝うことにしたとき、主人公はどんなことを考えたでしょう。
- ◎「いいえ、いいんです…」と答えた時の主人公はどんな気持ちだったでしょう。
- 手紙の内容を聞いた主人公は、どんなことを考えたでしょう。
- これまでのことを思い出しながら、お互いにとってよい結果を生み出す「親切・思いやり」について自分の思いを伝え合ってみましょう。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目

B-(7) 親切、思いやり
誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にすること。

【内容項目について大切にしたいこと】

人間関係の深さの違いや意見の相違などを乗り越え、思いやりの心とそれが伴った親切な行為を全ての人々に広げていこうとする態度を育てること。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基にした児童生徒の実態と授業者の願いから、指導の要点を明らかにします。



【児童の実態と要因】

- よさ：困っていると感じたら、助けようとする姿勢が多く見られる。
- 課題：相手の立場まで考えたうえでの、親切な行為や行動には至っていない。
- 要因：自分の考える「親切」が正しいことだと思い込むことが多いため、相手の立場や思いにまで気付いていない。

【実態から育成したいこと】

思いやりとは、相手の立場や気持ちを考えたり想像したりすることが大切であることに気づき、思いやりの心をもって親切な行為に努めようとする態度。

ポイント

3 「教材の分析」

考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討します。

●実態と要因から中心的に取り上げたい場面●

手紙の内容を聞いて主人公がどんなことを思ったのかを考えることを通して、親切や思いやりの中身について考える場面。

あ ら す じ

- ・冬休み、わたし（主人公）は友人と一緒にショッピングセンターに出かけた。
- ・小さな男の子が積んであったダンボール箱を崩してしまい、一緒にいたおばあさんは、男の子の面倒とダンボール箱の片付けに追われ、困っていた。
- ・私と友人は「片付けますよ」と名乗り出て片付けをしていると、店員に誤解され厳しく注意されてしまった。
- ・後日、おばあさんの説明により誤解が解け、店員から謝罪と感謝の手紙が届き、足取り軽く教室に戻った。

ポイント

4 「考え、議論したいこと」

「価値」「実態と要因」「教材」の分析を受け、**考え、議論したいこと**を明確にします。

●考え、議論したいこと●

思いやりの心をもった親切な行為には、相手の立場に立つことが必要であるということについて。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】

思いやりとは、相手の立場や気持ちを考えたり想像したりすることが大切であることに気づき、思いやりの心をもって親切な行為に努めようとする態度を育てる。



6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫

- ・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など

基本発問と予想される児童の反応		指導・援助
導入	<p>1 価値に関わる自分の行動や考えを振り返る。</p> <p>○親切、思いやりと聞いて、どんなことを思い浮かべますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・重い荷物を持ってもらうと嬉しい。 ・教室が騒がしかったら注意してあげる。 ・問題が解けなくて困っている人に答えを教える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「困っている人を助ける」など、広い捉えでいる児童には、これまでの経験等で具体的な場面を想起し、後段での自己を見つめる展開につなげられるようにする。
	<p>2 範読を聞き、話し合う。</p> <p>○だんボール箱の片付けを手伝うことにしたとき、主人公はどんなことを考えたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おばあさん、困っているな。助けてあげよう。 ・誰も手伝わないから、私たちが助けよう。 ・小さな男の子が心配だろうな。 <p>◎「いいえ、いいんです…」と答えた時の主人公はどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いいことしたはずなのに怒られるなんて、手伝いなんてやらなければよかった。 ・怒られたのは嫌だけど、おばあさんは、わかってくれて手伝ってよかった。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【深めるための補助発問】 おばあさんからお礼を言われた後に、店員さんに説明しに行ってもよかったのに、その場を立ち去った主人公には、どんな気持ちがあったのだろう。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・おばあさんは、ちゃんとお孫さんに会えてよかったな。 ・おばあさんは困っていたのに誰も助けなくて、でも無事に解決したみたいだからやっぱり手伝ってよかったな。 ・本当は、違うんですけど言いたいけど、ほめられるためにやったわけではないしな…おばあさんは分かってくれたからまあ、いいかな。 </div> <p>○手紙の内容を聞いた主人公は、どんな思いをもったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・店員さんが私たちのことを分かってくれて嬉しい。 ・おばあさんも、私たちのことを考えて、ちゃんと説明してくれたんだな。 ・自分のしたことで、喜んでくれた人がいたことは嬉しいな。やっぱりおばあさんの手伝いをしてよかったな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・おばあさんの様子や小さい男の子の様子、周りで見ている人など、周囲の状況を判断して手助けしようとした主人公の考え方を理解できるようにする。 ・よかれと思っての行動が正しく伝わらず、むしろ非難されしまったときの「やらなければよかった」という気持ちについて考えることで、立場を理解してもらえなかった側の気持ちについて理解できるようにする。 ・「深めるための補助発問」では、おばあさんから感謝され、やはり本来ならば褒められる行為であると同時に、おばあさんを手伝った行為の根底にある思いやりは、「相手のために」であることについて捉えられるようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【評価の視点】 相手の立場や気持ちを考えたり想像したりすることについて、多面的・多角的に考えている。 ①</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・手紙をもらったことで心が軽くなった主人公の内面を考えることで、自分の立場を理解してもらった嬉しさや、自分自身もおばあさんの立場を想像し行動に移せたことへの安堵や自信など、思いやりの心で行った行為のよさを味わえるようにする。
展開	<p>3 本時の学習を振り返る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>○これまでのことを思い出しながら、お互いにとって良い結果を生み出す「親切・思いやり」について自分の思いを伝え合ってみましょう。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・私は、これから相手の気持ちや様子を考えて、声をかけたいと思うけれど、どう思う？ ・ぼくは、これまで「やってあげる」って気持ちで手伝っていたことが多いけど、やっぱり、相手が喜んでくれるといいなって気持ちも、大事にできるといいなって思ったよ。 ・そういうときは、してもらったほうも、嬉しいよね。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の道徳的な価値について、「これまでの自分」「今の自分」「これからの自分」という視点で振り返りをするよう促す。 ・自分の考えを伝え、それに対する相手の考えを問うなど、「考えを伝え合う」ことで、より考えを深めることができるようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【評価の視点】 親切、思いやりで大切にしたいことについて振り返り、これからの生き方に生かそうと考えている。 ②</p> </div>
	終末	<p>4 教師の説話を聞く。</p>

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

思いやりとは、相手の立場や気持ちを考えたり想像したりすることが大切であることに気づき、思いやりの心をもって親切な行為に努めようとする態度を育てる。

評価

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

ポイント

①

【評価の視点】
相手の立場や気持ちを考えたり想像したりすることについて、多面的・多角的に考えている。

②

【評価の視点】
親切、思いやりで大切にしたいことについて振り返り、これからの生き方に生かそうと考えている。

2 「児童生徒の姿・発言」を想定

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

ポイント

想定する「具体的な学習状況」

- ① 小さな子どもとだんボール箱の両方で困っていたし、誰もおばあさんを助けようとしなかったし、自分が同じ立場だったら助けてほしいと思うから、やっぱり助けたことはよかったな。
- ② 思いやりは、ちゃんと相手のことを見たり聞いたりして、相手のことを考えることだと思った。みんなが笑顔になれるような行動をしていきたいな。

3 「評価の視点」に基づいた指導の工夫

【評価の視点】に基づいた、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

ポイント

発問の工夫

①

「物事を多面的・多角的に考えること」
ができるようにするために…

発問「「いいえ、いいんです…」と答えた時の主人公はどんな気持ちだったでしょう。」
・一方的に注意されたことへの怒りとともに、おばあさんに何度もお礼を言われたときの気持ちを考えることで、自分の判断の是非に揺れる葛藤について、気付けるようにする。

深めるための補助発問

「おばあさんからお礼を言われた後に、店員さんに説明しにいてもよかったのに、その場を立ち去った主人公には、どんな気持ちがあったのだろう。」
・おばあさんから感謝され、やはり本来ならば褒められる行為であると思うと同時に、おばあさんを手伝った行為の根底にある思いやりは、「相手のために」であることについて捉えられるようにする。

学習活動の工夫

②

「自己を見つめること」
ができるようにするために…

本時の学びと自分のこれまでの生活を関わらせながら振り返る。

・「思いやりの心をもった親切な行為」について、これまでの自分の経験を振り返りながら今の自分の考えを仲間と伝え合うことで、これから自分が出会うかもしれない場面についても想起し、今後自分にも起こり得ることとして捉えられるようにする。

指導

主題構成表

■内容項目

D-(19) 生命の尊さ

生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

■価値の分析

- ・生命を尊ぶことは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直に応えようとする心の現れである。
- ・連続性や有限性を有する生物的・身体的生命に限ることではなく、その関係性や精神性における社会的・文化的生命、さらには人間の力を超えた畏敬されるべき生命のことである。
- ・生命を尊ぶためには、まず自己の生命の尊厳、尊さを深く考えることが重要である。
- ・生きていることの有り難さに深く思いを寄せることから、自己以外のあらゆる生命の尊さへの理解につながるよう指導することが大切である。

■内容項目から見た生徒の実態

- ・自他の命を大切にしなければならないという理解している生徒は多い。
- ・一方で、生命の尊さへの理解が浅く、身近な生活や生きていることの有り難さに深く思いを寄せて考えるなどの意識が乏しい。
- ・日常的に起こっている事案に対して自分事として捉える意識が低く、仲間へのからかいや生命軽視の軽はずみな言動も見受けられる。

■要因

- ・生徒の生活様式も変化し、自然や人間との関わりの希薄さから、生命の尊さについて実感を伴って考える機会が十分とは言えない。
- ・身近な人の死に接したり、人間の生命の有限さやかけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験が少なく、生命あるものに生かされていることへの感謝の念や自覚（認識）は薄い。

■教材の分析

- ・ばあばの生き方や考え方について考えることを通して、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直に応えようとする「生命の尊さ」の価値を理解することに適した教材である。
- ・ばあばに「長生きしてや。」と言っている一方で、時折ぶつぶつ文句を言ったり、腹を立てたりしている主人公の気持ちを考えるとともに、ばあばの存在（生き方・考え方）に対する主人公の見方・考え方について考えられるようにしたい。
- ・葬式後の母の言葉から、ばあばからもらっていたことの方がいっぱいあったと気付いた主人公の気持ちを考えることを通して、限りある生命を精一杯生きることが生命を尊重することにつながっていると気づき、生きていることの有り難さに深く思いを寄せて自他の生命を尊重しようとする心情を育てたい。

■ねらい

限りある生命を精一杯生きることが、かけがえのない生命を尊重することにつながると気づき、生きていることの有り難さに深く思いを寄せて、自他の生命を尊重しようとする心情を育てる。

■展開の構想

- ・祖父母等への思いや生活経験を尋ね、本時の価値の方向を理解する。
- ・「長生きしてや。」と言っている一方で、文句を言ったり腹を立てたりすることもあったぼくの気持ちを考えるとともに、ばあばの存在に対するぼくの見方・考え方について交流する。
- ・限りある生命を精一杯生きることがかけがえのない生命を尊重することにつながると気づき、生きていることの有り難さについて深く考える。
- ・曾祖母との関係に限らず、親や友達等との関係の中でこれまでの自分を見つめ、振り返る。

■基本発問 (◎中心発問)

- 生活を共にしている(いた)祖父母や曾祖父母の姿から考えさせられた経験はありますか。
- 「長生きしてや。」と言っている一方で、ぼくはどんな思いで文句を言ったり、腹を立てたりしていたのでしょうか。
- ばあばがトレーニングをしたり、予防接種を受けることを承知したりしたのはどうしてでしょうか。
- ◎ばあばからもらっているものってどんなものだったのでしょうか。
- 「自他の生命を尊重する」とは、どういうことか、これまでの自分を振り返ってみましょう。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

【内容項目について大切にしたいこと】

生命を尊ぶとは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らも多くの生命によって生かされていることに素直に答えようとする心の現れであることを理解し、自他の生命を尊重しようとする心情を育てること。

■内容項目

D-(19) 親切、思いやり

生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基にした児童生徒の実態と授業者の願いから、指導の要点を明らかにします。

【生徒の実態と要因】

- よさ：自分や他人の命を大切にしなければならないことは理解している。
- 課題：生命の尊さへの理解が浅く、身近な生活や生きていることの有り難さに深く思いを寄せて考えるなどの意識が乏しい。
- 要因：生活様式も変化し、自然や人間との関わり希薄さから、生命の尊さについて考える機会が十分とは言えない。

【実態から育成したいこと】

生命は大切であると知ってはいるものの、「自分が精一杯生きること」や「他者も同じように生きたいと願っていること」等、自他の生命の在り方について深く考えることは少ないため、登場人物のもつ生命観をもとに、自他の生命の在り方に対する見方・考え方、感じ方について深く考え、自他の生命を尊重しようとする心情。



ポイント

3 「教材の分析」

考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討します。

●実態と要因から中心的に取り上げたい場面●

母の「もらっていることのほうが、いっぱいあったのね…」という言葉に対し、ぼくも「そうかもしれないな。」と思った場面。

あ ら す じ

- ・ぼくが小学五年生の時に曾祖母「ばあば」を家に迎え、「ばあば」との生活が始まる。
- ・いろんなことがあって苦勞の連続だったが、限りある生命を精一杯生きようとするばあばの生き方に触れる。
- ・ばあばと一緒にいることによる困り感に対し、文句を言ったり、腹を立てたりする。
- ・葬式後の母の言葉から、ばあばにいろいろしてあげていると思っていたけれど、もらっていることのほうがいっぱいあったことに気付く。

ポイント

4 「考え、議論したいこと」

「価値」「実態と要因」「教材」の分析を受け、**考え、議論したいこと**を明確にします。

●考え、議論したいこと●

九十年あまりの人生が苦勞の連続だったばあばに文句を言ったり腹を立てたりしているぼくの、ばあばに対する見方や考え方について。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】

限りある生命を精一杯生きることが、かけがえのない生命を尊重することにつながると気づき、生きていることの有り難さに深く思いを寄せて、自他の生命を尊重しようとする心情を育てる。



6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫

- ・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など



本時の展開

基本発問と予想される生徒の反応		指導・援助
導入	1 価値に関わる自分の行動や考えを振り返る。 ○生活を共にしている（いた）祖父母や曾祖父母の姿から考えさせられた経験はありますか。 ・食事の時に、いつもゆっくり丁寧に「いただきます・ごちそうさま」をしていたな。 ・「ありがとう」って、よく言っていたな。	・祖父母や曾祖父母と「ともに生きる」中で、印象に残っていること等について交流し、価値に迫る内容を取り上げて、価値の方向付けをする。
	2 教材「ばあば」を読んで、話し合う。 ○「長生きしてや。」と言っている一方で、僕はどんな思いで文句を言ったり、腹を立てたりしていたのでしょうか。 ・ばあばの世話、めんどくさいな。 ・床に物をこぼすし、汚いから嫌だな。 ○ばあばがトレーニングをしたり、予防接種を受けることを承知したりしたのはどうしてなのでしょう。 ・家族にこれ以上迷惑をかけられない。 ・自分でできることは、自分で何とかしたい。	・ばあばの年齢や状態について、確認する。 ・年をとっているから仕方ないと理解しているものの、ばあばの行動に対する困り感について考えることで、自分本位で判断しているぼくの気持ちを共有する。 ・ばあばの立場から生命の在り方を見つめることで、「限りある生命を精一杯生き、自分でやることは自分でやりたい」と願っていることに気付けるようにする。
展開	【深めるための補助発問】 九十年あまりの人生が苦労の連続だったにも関わらず、精一杯生きようとしているばあばのことをどう思っているのでしょうか。	・「深めるための補助発問」では、ばあばの行動だけでなく、存在に対してどう考えているのかを見つめることで、生命について客観的に見たり、俯瞰して捉えたりしたことを議論することができるようにする。
	・腰が曲がって、杖をついてでも、ごみ出しや洗濯物畳みをするばあばはすごいし、トレーニングしている姿も尊敬する。 ・精一杯生きようとしているばあばに対して、文句を言ったり腹を立てたりするのは失礼だし、恥ずかしい。	【評価の視点】 「かけがえのない生命を尊重する」ことについて多面的・多角的に考えている。 ①
	◎ばあばからもらっているものってどんなものだったのでしょうか。 ・精一杯生きようとする事。 ・どんな時も生きたいという気持ちを大切にすること。 ・つらいことや苦しいことがあっても、楽しいことや嬉しいことがきつとあると信じて生きていくこと。	・「生命を尊重する」ことや「生きていることの有り難さ」について深く思いを寄せて考えられるようにする。 ・ぼく（自己）の考える生命の尊さだけでなく、ばあば（他者）の生命に対する見方・考え方について深く考えることで、自己以外のあらゆる生命の尊さへの理解を促すとともに、多くの生命によって生かされているという視点に気付くことができるようにする。
前段	【深めるための補助発問】 ばあばのどんな生き方がぼくにそう感じさせたのでしょうか。	
	・ばあばはたくさんの苦労や苦しみを味わってきたけれど、トレーニングをしたり、予防接種を受けたりしながら長生きしたい、みんなを悲しませたくないという思いがあったはず。そういうばあばの生き方がすごいなと思ったから。	
後段	3 本時の学習を振り返る。 ○「自他の生命を尊重する」とは、どういうことか、これまでの自分を振り返ってみましょう。	・曾祖母との関係に限らず、親や友達等との関係の中で、これまでの自分を見つめ、考えられるように具体的な場面を紹介する。
	・これまで、「生きていること」の有り難さについて、深く考えたことはなかったけれど、自分でやることは自分でやるようにして、限りある生命を大切にしていきたい。 ・嫌なことがあった時に、生命を軽視するようなことを言うてしまうことがあったので、言葉の重みを考えて生活したい。	【評価の視点】 「自他の生命を尊重する」ことについて、これまでの自分を見つめ考えている。 ②
終末	4 教師の説話を聞く。	・自分だけでなく、周りの人も同じように限りある生命を精一杯生きていることに気付く説話をする。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

限りある生命を精一杯生きることが、かけがえのない生命を尊重することにつながると気づき、生きていることの有り難さに深く思いを寄せて、自他の生命を尊重しようとする心情を育てる。

評価

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

ポイント

【評価の視点】

- 1 「かけがえのない生命を尊重する」ことについて、多面的・多角的に考えている。

【評価の視点】

- 2 「自他の生命を尊重する」ことについて、これまでの自分を見つめ考えている。

2 「児童生徒の姿・発言」を想定

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

ポイント

想定する「具体的な学習状況」

- ①自分でできることを精一杯やることは、限りある生命を大切にすることでもあるし、周りの人に生かされていることに応えようとするということでもあると思う。
- ②これまで、「生きていること」の有り難さについて、深く考えたことはなかったけれど、自分でやれることは自分でやるようにして、限りある生命を大切にしていきたい。

3 「評価の視点」に基づいた指導の工夫

【評価の視点】に基づいた、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

ポイント

発問の工夫

①

「物事を多面的・多角的に考えること」
ができるようにするために…

発問「ばあばからもらっているものってどんなものだったのでしょうか。」

- ・「生命を尊重する」ことや「生きていることの有り難さ」について深く思いを寄せて考えられるようにする。

深めるための補助発問

「ばあばのどんな生き方がぼくにそう感じさせたのでしょうか。」

- ・ぼく（自己）の考える生命の尊さだけでなく、ばあば（他者）の生命に対する見方・考え方について深く考えることで、自己以外のあらゆる生命の尊さへの理解を促すとともに、多くの生命によって生かされているという視点に気付くことができるようにする。

学習活動の工夫

②

「自己を見つめること」
ができるようにするために…

本時の学びと自分のこれまでの生活を関わらせながら振り返る。

- ・曾祖母との関係に限らず、親や友達等との日常生活の具体的な場面を紹介し、これまでの自分を見つめ考えることができるようにする。また、導入で交流した「ともに生きる」中で、印象に残っていることとも結び付け、価値について触れるようにする。

指導

主題構成表

■内容項目

B-(6) 思いやり、感謝

思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。

■価値の分析

- ・「思いやりの心」は、他者の立場を尊重しながら、親切にし、いたわり、励ます生き方として現れる。それは、黙って温かく見守るといった表に現れない場合もある。
- ・現在は、社会の発展と共に生活が豊かになる一方で、互いに助け合いながら生活していることを実感しにくくなっている。私たちは、多くの人々の善意や支えによって今の自分があるにも関わらず、そのことを自覚し感謝することがなかなか難しい。
- ・さりげない思いやりのもつ温かさを自覚するとともに、他人の善意や思いやりで満ちた言動に対して、素直に有り難いと感じられる心が求められている。

■内容項目から見た生徒の実態

- ・日々のよさみつけ活動を通して周りの仲間へ感謝を伝える活動を継続的に行っており、多くの生徒が身近な学級の仲間のよさや温かさに気付いている。
- ・周りの人の善意や思いやりを当たり前で思ったり、自分を支えてくれている方へ恥ずかしい、照れくさいなどの意識でなかなか感謝の気持ちを伝えられなかったりする姿も見られる。

■要因

- ・小学校から身近な仲間のよさを見つめる場が設定されており、積み重ねの中で、その価値が実感できている。
- ・思いやりのある行為を受けても、されて当たり前と考え、相手の思いに気付いていなかったり、感謝の自覚が弱かったりする。
- ・有り難さを内心感じていても、それを表現することに抵抗があったり、表現の仕方が分からなかったりする。

■教材の分析

- ・合唱コンクールの練習で、夜遅く帰宅する少女のために、くだもの屋の店主が毎晩営業時間を延長して明かりをつけてくれていた。人はさりげない善意や思いやりによって支えられていることに気づき、感謝することの大切さを考え深めることのできる教材である。
- ・少女は、店の明かりにありがたさを感じていたものの、店主の気持ちは知る由もなく、コンクール後、日常生活に戻ると、「どうでもいいこと」となっていた。その場面から、店主のさりげない思いやりで気付いていなかった少女の多様な考え方や感じ方を引き出したい。
- ・客としてくだもの屋を訪れた少女は、偶然、当時明かりがっていた理由を知る。店主の話聞いて、もう一度頭を下げた場面での少女の気持ちを追求することで、さりげない善意に支えられていることに気づき、感謝していこうとする心情を育てたい。

■ねらい

人間はさりげない善意や深い思いやりによって支えられ、守られていることに気づき、そのことに感謝していこうとする心情を育てる。

■展開の構想

- ・さりげない善意や思いやりによって支えられた経験について振り返り、本時の価値の方向を理解する。
- ・くだもの屋の店主が少女のために明かりをつけてくれていたさりげない思いやりで、気付いていない少女の多様な考え方や感じ方を交流する中で、自分にも共感できる気持ちに気付く。
- ・くだもの屋の店主のように、周囲に遠くからでも自分たちをさりげなく支えている思いやりがあることに気づき、感謝していこうという気持ちをもつ。(役割演技)
- ・導入と関連させて、自分の経験を振り返り、さりげない思いやりと感謝について、自己を見つめる。

■基本発問 (◎中心発問)

- 地域の方や上級生との関わりについて、有り難いなと思ったことはありますか。
- くだもの屋さんでしてくれたことが、どうして「どうでもいいこと」になったのでしょうか。
- ◎明かりの存在を忘れていたのに、どうしてもう一度頭を下げたのでしょうか。【役割演技】
- 今の演技を見て、少女はくだもの屋さんの思いやりを受けて、くだもの屋さんにどんなことを伝えたいと思いますか。
- 今まで、思いやりを受けたとき、感謝することはできましたか。そのことを今思うとどうですか。できないとき、どんな課題がありますか。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

【内容項目について大切にしたいこと】

さりげない思いやりのもつ温かさを自覚するとともに、他人の善意や思いやりに満ちた言動に対して、素直に有り難いと感じられる心情を育むこと。

■内容項目

B-(6) 思いやり、感謝

思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基にした児童生徒の実態と授業者の願いから、指導の要点を明らかにします。

【生徒の実態と要因】

- よさ：多くの生徒が身近な学級の仲間よさや温かさに気付いている。
- 課題：周り人の善意や思いやりを当たり前にもったり、自分を支えてくれている方へなかなか感謝の気持ちを伝えられなかったりする姿が見られる。
- 要因：思いやりのある行為を受けても、されて当たり前と考え、相手の思いに気付いていなかったり、感謝の自覚が弱かったりする。ありがたさを内心感じていても、それを表現することに抵抗があったり、表現の仕方が分からなかったりする。

【実態から育成したいこと】

自分たちの周りには、さりげない善意や深い思いやりをもって、自分たちを支え守っている人たちがいることに気付き、そのことを当たり前のことだと思わず、自覚して感謝する心情。



ポイント

3 「教材の分析」

考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討します。

●実態と要因から中心的に取り上げたい場面●

くだもの屋さんの話を聞いてもう一度頭を下げた場面。

あ ら す じ

- ・合唱コンクールの練習で、夜遅く帰宅する少女は心細さを紛らわすために、歌いながら歩いていた。そんな少女のために、毎晩営業時間を延長して明かりをつけてくれていたくだもの屋があった。客としてくだもの屋を訪れた彼女は、偶然そのことを知り、くだもの屋夫婦の温かい心遣いに感謝する。

ポイント

4 「考え、議論したいこと」

「価値」「実態と要因」「教材」の分析を受け、**考え、議論したいこと**を明確にします。

●考え、議論したいこと●

自分が気付いていないこと・意識していないことでも、自分のことを思って行動してくださる人の善意や思いやりによって、支えられ守られていることに気付き、それに感謝することの難しさや大切さについて。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】

人間はさりげない善意や深い思いやりによって支えられ、守られていることに気付き、そのことに感謝していこうとする心情を育てる。



6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫

- ・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など

	基本発問と予想される生徒の反応	指導・援助
導入	<p>1 価値に関わる自分の行動や考えを振り返る。</p> <p>○地域の方や上級生との関わりについて、有り難いなと思ったことはありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域のおばあさんに声をかけてもらっている。 ・体育祭で上級生から優しくアドバイスをもらった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・思いやりを受けて感謝したことについて聞き、自己を見つめるときの価値適用の場を広げる。(地域の方や上級生等、身近でない人との関わりについて聞く。)
展開前段	<p>2 教材「夜のくだもの屋」を読んで、話し合う。</p> <p>○くだもの屋さんがしてくれたことが、どうして「どうでもいいこと」になったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンクールが終わり、自分には関係なくなった。 ・早い時間に帰れるので、その存在すら忘れていた。 ・くだもの屋さんがまさか自分のためにやっているとは思わず、そもそも意識していなかった。 <p>◎明かりの存在を忘れていたのに、どうしてもう一度頭を下げたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・くだもの屋さんの優しい心遣いに気付かなかったことに、申し訳ないという気持ちだったから。 ・いつも自分のことを思っていて明かりをつけていたことを知って、感謝の気持ちを伝えたかったから。 <p><役割演技> (少女：生徒 病院にいる友達：教師)</p> <p>友達：お見舞いありがとう。なんかとてもいい顔をしているけど、何かあったの？</p> <p>少女：くだもの屋でお見舞いを買ったら、そのくだもの屋さんが、私がコンクールの練習で夜遅かったとき、心細くならないように、明かりを付けていたことを知ったんだ。</p> <p>【深めるための補助発問】</p> <p>友達：そうだったんだね。くだもの屋さんが、見ず知らずのあなたのために明かりをつけてくれたことを知って、最初と今では、どんな気持ちの変化があった？</p> <p>少女：最初はくだもの屋さんの思いに気付かず、何も思っていなかったけれど、いつも支えられていたことに気付いて嬉しかったし、その思いやりに感謝していきたいなと思ったよ。</p> <p>友達：本当にそうだね。だからいい顔をしていたんだね。</p> <p>○今の役割演技を見て、少女はくだもの屋さんの思いやりを受けて、くだもの屋さんにどんなことを伝えたいでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思いやりのある行為への感謝の気持ち。 ・さりげない思いやりに気付かなかった申し訳なさ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・範読の際、少女がくだもの屋さんにしたことで、「残念だな」と思うところ、「いいなあ」と思うところを考えながら読むように声をかけ、基本発問に生かす。 ・くだもの屋さんが、少女にとっては、遠い存在である(身近な人ではない)ことを押さえる。 ・「申し訳ない」「驚いた」と答えた生徒に「感謝」という意見についてどう思うかと問い返し、価値に迫る。 ・「感謝」の対象となる、くだもの屋さんの少女への思いやりに気付けるよう、明かりをつけていた理由を問い返す。 ・役割演技を位置付けることで、少女が気付いた感謝の気持ちについて掘り下げるきっかけとする。 ・最初(思いやりに気付いていなかったとき)と今(思いやりに気付いた後)の気持ちについて触れることで、少女が気付かずとも、思いやりに支えられていたことを実感できるようにする。 ・役割演技後、全員の生徒に「少女はくだもの屋さんの思いやりを受けて、くだもの屋さんにどんなことを伝えたいでしょう。」と問いかけ、ねらいに迫る。 <p>【評価の視点】</p> <p>人はさりげなく温かい善意や深い思いやりによって支えられ守られていることに気づき、感謝することの難しさや大切さについて考えている。 ①</p>
展開後段	<p>3 本時の学習を振り返る。</p> <p>○今まで、思いやりを受けたとき、感謝することはできましたか。そのことを今思うとどうですか。できないとき、どんな課題がありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今まで、いろいろな人の思いやりに支えられてきたと思うけど、当たり前になったり、恥ずかしくなったりして、感謝することはあまりできなかった。これからは周囲の人の支えを当たり前と思わず、思いやりに気づき感謝を伝えたり、自分のできることで応えたりしていける人になりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・導入時に確認した「さりげない思いやり」という視点に関連して、本時の学習を振り返るようにする。 <p>【評価の視点】</p> <p>「相手の気持ちや思いに気づき、思いやりに対して感謝すること」について、これまでの自分を見つめ、これからの自分について考えている。 ②</p>
終末	<p>4 教師の説話を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の地域への感謝の思いがあふれている活動を紹介し、その思いを広げる。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

人間はさりげない善意や深い思いやりによって支えられ、守られていることに気づき、そのことに感謝していこうとする心情を育てる。

評価

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

ポイント

①

【評価の視点】

人はさりげなく温かい善意や深い思いやりによって支えられ守られていることに気づき、感謝することの難しさや大切さについて考えている。

②

【評価の視点】

「相手の気持ちや思いに気づき、思いやりに対して感謝すること」について、これまでの自分を見つめ、これからの自分について考えている。

2 「児童生徒の姿・発言」を想定

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

ポイント

想定する「具体的な学習状況」

- ①主人公は、くだもの屋さんの思いやりで気づいておらず、申し訳ないという思いがあった。見ず知らずの自分のことを思って行動してくださったことに、感謝の気持ちがあつて礼をしたと思う。
- ②今まで、いろんな人の思いやりで支えられてきたと思うが、当たり前で思ったり、恥ずかしがったりして、周りで支えてくれた人の思いやりで気づき、感謝することはあまりできなかった。これからは周囲の人の支えを当たり前と思わず、思いやりで気づき、感謝を伝えたり、自分のできることで応えたりできる人になりたい。

3 「評価の視点」に基づいた指導の工夫

【評価の視点】に基づいた、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

ポイント

発問の工夫

①

「道徳的価値の意義や大切さの理解」

ができるようにするために…

発問「明かりの存在を忘れていたのに、どうしても一度頭を下げたのでしょうか。」

深めるための補助発問

「くだもの屋さんが、見ず知らずのあなたのために明かりをつけてくれたことを知って、最初と今では、どんな気持ちの変化があった？」

- ・価値理解の発問の後で、少女（生徒）と病院の友達（教師）の役割演技を位置付けることで、実感をもって少女の生き方を感じ取りねらいに迫っていく。役割演技を通して、思いやりと感謝について実感をもって理解を深める。

深めるための補助発問

「今の役割演技を見ていて、少女はくだもの屋さんの思いやりを受けて、くだもの屋さんになんかことを伝えたいでしょう。」

- ・役割演技後、全員の生徒に問いかけることで、「感謝する」というねらいに迫る。

学習活動の工夫

②

「自己を見つめること」

ができるようにするために…

本時の学びと自分のこれまでの生活を関わらせながら振り返る。

- ・「今まで思いやりを受けたとき、感謝することはできましたか。そのことを今思うとどうですか。できないとき、どんな課題がありますか。」と問い、これまでの地域の方や異学年との交流や体験をもとに自己を見つめ実践意欲を高める。

指導

主題構成表

■内容項目

C-(16) 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度
郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。

■価値の分析

- ・郷土とは、生まれ育った環境に伴う精神的なつながりがある場所を示し、伝統とは、長い歴史を通じて培い伝えてきた精神的な在り方のことである。
- ・地域社会に尽くし、自己の人生を大切に生きてきた先人や先達への尊敬と感謝の気持ちを育みながら、郷土に対する認識を深め、郷土を愛し、その発展に努めることが求められる。
- ・社会に尽くした先人や先達によって自分が支えられて生きていることを自覚し、郷土のために自分ができることは何かを考え、郷土の発展のために自分が寄与しようとする心や態度を育むことが大切である。

■内容項目から見た生徒の実態

- ・校内や地域の行事やボランティア活動に意欲的に参加する生徒が多く、楽しんで参加している姿がある。
- ・地域の方に支えられていると気付いている生徒は多いが、自分たちの力で郷土を発展させようと考えたり、地域の活性化のために活動しようという意欲をもったりしている生徒は少ない。

■要因

- ・地域で行われる行事の意味や歴史について深く考えたことがなく、地域の方の苦労や思いを十分に理解していない。
- ・参加することが地域に貢献することだと思っており、他の方法を考えようとするまでに至らない。

■教材の分析

- ・帰省中に起きた大地震による津波で被災した郷土の村で、濱口梧陵が、住民を必死に避難誘導したり、巨額の私財を投じて堤防をつくったりするなど、故郷を守ろうと懸命に尽力する姿から、郷土を愛し、その発展に努める尊さについて考えを深めることができる教材である。
- ・被災した村人の動揺が激しく、村を去る人が相次ぐ中、梧陵は村人たちが生活を再建できるよう食料や物資を支援したり、村人を堤防工事に雇って働き口を生み出し、自分たちの手で村を取り戻そうとしたりするなど、郷土を自身の手で守りたいという強い思いから様々な行動を起こしたことを感じ取れるようにしたい。
- ・現在も地域の小中学生が広村堤防に土盛りをすることから、その行事を続けている理由を考え、郷土の発展のために自分が引き継ぐことや地域のために貢献していこうとする実践意欲や態度につなげたい。

■ねらい

地域を守りたいという強い願いで行動を起こしたり、その先人や先達の思いを引き継いで行事を現在まで継承したりすることが郷土の発展につながることに気づき、自身が主体的に郷土に関わっていこうとする実践意欲と態度を育てる。

■展開の構想

- ・地域の人との関わりのある活動にどんなものがあったかを想起し、価値の方向を理解する。
- ・梧陵が村のために行ったこととその理由を考える中で、郷土への誇りや愛着をもち、発展させたいという願いで行った行動であることを想起し、道徳的価値に迫る。
- ・現在も行事が引き継がれている理由を考え、先達への感謝の思いを継承していることを理解し、実践意欲や態度につなげる。
- ・自分を見つめ、自己を振り返るとともに、これからの自分の生き方について考える。

■基本発問 (◎中心発問)

- これまで、地域のどんな活動に参加してきましたか。
- 梧陵のすごいと思うところはどこですか。
- ◎津波から一夜明け、大変な様子の広村を見ながら、梧陵はどんなことを考えたのでしょうか。
- 現在も広村堤防での行事が続けられているが、小中学生はどのような思いで参加しているのでしょうか。
- これまでの自分と地域との関わりについて振り返り、どんなことを考えましたか。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目

C-(16) 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度

郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。

【内容項目について大切にしたいこと】

地域社会のために尽くしてきた先人や先達の思いを知り、尊敬と感謝の気持ちを育み、郷土に対する認識を深め、その発展に努めようとする実践意欲と態度を育てること。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基にした児童生徒の実態と授業者の願いから、指導の要点を明らかにします。



【生徒の実態と要因】

- よさ：地域と学校とのつながりが強く、地域の方と関わるよさや温かさを実感しているため、行事やボランティア活動に多くの生徒が積極的に参加している。
- 課題：地域行事を大人が運営する楽しいものと捉えており、その意義を考えたり、地域に貢献したいという願いをもって活動したりしている生徒は少ない。
- 要因：地域の方の思いや行事の意味を考えたりすることがなく、自身の行動が郷土の発展につながるという自覚が弱い。

【実態から育成したいこと】

地域のために尽くした先人や先達によって自分が支えられていることを自覚し、その人々への尊敬と感謝の気持ちを深めるとともに、郷土のために自分ができることは何かを考え、進んで郷土の発展に努めようとする実践意欲と態度。

ポイント

3 「教材の分析」

考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討します。

●実態と要因から中心的に取り上げたい場面●

津波から一夜明けた混乱の中、梧陵が村について考える場面。

あ ら す じ

- ・1854年12月24日、広村（現:和歌山県）で大地震が発生し、津波に襲われる。たまたま故郷にいた濱口梧陵は、逃げ惑う人々を励ましながらか避難を誘導したり、田んぼの稲むらに火をつけて道しるべとし避難場所が分かるようにしたりした。
- ・一夜明けた村の様子を見た梧陵は、被災した人が生活を再建できるよう支援したり、巨額の資材を投じて堤防をつくったりするなど村人のために行動を起こし、元の広村を取り戻そうと力を尽くした。
- ・現在も広村堤防は残っており、「津浪祭」や「稲むらの祭り」などの行事が毎年続けられている。

ポイント

4 「考え、議論したいこと」

「価値」「実態と要因」「教材」の分析を受け、**考え、議論したいこと**を明確にします。

●考え、議論したいこと●

梧陵は、故郷の広村の今後について、どんなことを考え、行動に移したのかについて。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】

地域を守りたいという強い願いで行動を起こしたり、その先人や先達の思いを引き継いで行事を現在まで継承したりすることが郷土の発展につながることに気付き、自身が主体的に郷土に関わっていこうとする実践意欲と態度を育てる。



6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫

- ・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など



本時の展開

	基本発問と予想される生徒の反応	指導・援助
導入	<p>1 価値に関わる自分の行動や考えを振り返る。</p> <p>○これまで、地域のどんな活動に参加してきましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな祭りに参加した。○○祭りでは、吹奏楽部の演奏も披露した。楽しかったな。 ・○○のつどいでは、ボランティアとして、準備やごみ拾いなどの手伝いをした。 ・公民館で行われる料理教室や講演会に参加したこともある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が参加してきた地域活動を振り返ることで、展開後段で自己を見つめるときの視点にもつなげる。 ・参加した様子の写真を提示し、振り返りができるようにする。
展開	<p>2 教材「稲むらの火」を読んで、話し合う。</p> <p>○梧陵さんのすごいと思うところはどこですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の命も危険な中、村人を助けるために率先して行動したこと。 ・巨額の私財を投げ堤防をつくり、工事に村人を雇うなど故郷のために思って行動したこと。 <p>◎津波から一夜明け、大変な様子の広村を見ながら、梧陵はどんなことを考えたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命が助かってよかった。でも、広村は元に戻らないかもしれない。 ・故郷がこのままなくなってしまうのは耐えられない。 ・自分に何かできることはないのだろうか。 <p>【深めるための補助発問】 自分の私財を投じてまで、故郷のためにここまで行動できたのはなぜでしょう。</p> <p>・広村の人には、幼い頃から様々な場面でお世話になっている。そんな人たちに何としてでも元気を取り戻してほしいから。</p> <p>・自分が生まれ育った場所がなくなるのは絶対に嫌だ。だから、恩返しとして何か自分にできることをしたいと強く思ったから。</p> <p>○現在も広村堤防での行事が続けられているが、小中学生はどのような思いで参加しているのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔の方々のおかげで、今、安心して暮らせていることに感謝している。 ・自分たちがこの行事を引き継いでいかなければいけない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教材を読む前に梧陵さんのすごいところを見つけるように問いかけ、価値理解に迫るための視点を焦点化する。 ・梧陵さんも村の惨状や人々の様子を見て、弱気になったり、あきらめそうになったりする気持ちがあったことに気付けるようにする。 ・「深めるための補助発問」では、梧陵さんが村の人や郷土を大切に思う気持ちや郷土復興への思いの強さに気付けるようにする。
前段	<p>3 本時の学習を振り返る。</p> <p>○これまでの自分と地域との関わりについて振り返り、どんなことを考えましたか。</p> <p>・防災についてこれまで学んできて、地域の人との関わりは大切だと分かっているが、実際には何も行動していなかった。地域の行事に参加したり、挨拶をしたりすることも、恩返しの一つだと思ったので、これからは大切にしていきたい。</p> <p>・これまで、ボランティアなどをしてきたが、みんながやっているからやっていただけだった。その行事の意味や地域の人々の思いまで考えたことがなかった。これからも参加していくが、自分なりにそれを考えて参加したいと思う。</p>	<p>【評価の視点】 地域に貢献することの意義や価値について考えている。 ①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・梧陵さんの思いを受け継ぎながら行事が行われていることを考えることで、価値への理解をさらに深める。
展開後段	<p>4 教師の説話を聞く。</p>	<p>【評価の視点】 地域とのつながりや自分がこれまでにしてきたことや課題を見つめ、これからの自分について考えている。 ②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の発展を願って活動している地域の方の動画を流し、自分の姿を振り返ることができるようにする。
終末		<ul style="list-style-type: none"> ・地域行事に関わるようになったきっかけと今の思いについて、教師の体験談を話す。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

地域を守りたいという強い願いで行動を起こしたり、その先人や先達の思いを引き継いで行事を現在まで継承したりすることが郷土の発展につながることに気づき、自身が主体的に郷土に関わっていこうとする実践意欲と態度を育てる。

評価

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

ポイント

【評価の視点】

- 1 地域に貢献することの意義や価値について考えている。

【評価の視点】

- 2 地域とのつながりや自分がこれまでにしてきたことや課題を見つめ、これからの自分について考えている。

2 「児童生徒の姿・発言」を想定

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

ポイント

想定する「具体的な学習状況」

- ① 村の人には、幼い頃から様々な場面でお世話になっているし、自分が生まれ育った場所がなくなるのは絶対に嫌だ。だから元気を取り戻してほしいし、恩返しのために何かしたい。
- ② これまで、ボランティアなどへ参加してきたが、みんながやっているからやってただけで、その行事の意味や地域の人の思いまで考えたことがなかった。自分なりにそれを考えて参加したい。

3 「評価の視点」に基づいた指導の工夫

【評価の視点】に基づいた、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

ポイント

発問の工夫

①

「道徳的価値の意義や大切さの理解」

ができるようにするために…

発問「津波から一夜明け、大変な様子の広村を見ながら、梧陵はどんなことを考えたのでしょうか。」

- ・何とかしなければ、という強い思いの中にも、自分にできることは本当にあるのか、それが正しいのか、弱気になる部分もあったことを想起するなど、多様な思いが出せるようにする。

深めるための補助発問

「自分の私財を投じてまで、故郷のためにここまで行動できたのはなぜでしょう。」

- ・自己犠牲を払ってまでも故郷のために尽力しようと決意したのは、故郷の人々に対する感謝の思いや故郷を愛し存続させたいという強い願いであることに気付くことができるようにする。

学習活動の工夫

②

「自己を見つめること」

ができるようにするために…

本時の学びと自分のこれまでの生活を関わらせながら振り返る。

- ・導入で想起した地域の行事について、運営している地域の方の話を動画で視聴し、その思いや願いを知ること、自身のこれまでの姿を振り返ったり、今後、郷土のために何ができるか考えたりする中で、進んで関わっていこうという実践意欲や態度につながるようにする。

指導



3 道徳教育パワーアップ実践校 実践事例紹介

(1) 岐阜市立白山小学校

発表資料



- 1 研究の内容
＜研究主題＞
自己を見つめ、よりよい生き方について考える道徳教育の在り方
- 2 本年度の実践
 - (1) 研究内容1－(1) 「各指導過程におけるねらいの明確化」について
 - (2) 研究内容1－(2) 「過程のねらいに至るための手立ての工夫」について
 - (3) 研究内容2 「全教育活動で行う道徳教育の在り方」について
- 3 実践を振り返って

(2) 関市立津保川中学校

発表資料



- 1 研究の内容
＜研究主題＞
自己を見つめ、よりよい生き方をめざして実践しようとする生徒の育成
～自己、他者、郷土の思いをつなぐ活動を通して～
- 2 本年度の実践
 - (1) 研究内容1 道徳科の授業を要とし、全教育活動を通して行う道徳教育の推進
 - (2) 研究内容2 自己を見つめ、自己の生き方について考えを深める授業展開の工夫
 - (3) 研究内容3 地域・家庭と連携し、道徳性を育む活動の充実
- 3 実践を振り返って



(1) 岐阜市立白山小学校

1 研究の内容

岐阜市立白山小学校は、全児童数145名、全学年が25名前後の単学級の小規模校である。入学してから一度もクラス替えが行われなかったため、同じメンバーで安心して過ごすことができる反面、人間関係や相手への見方が固定化しやすくなってしまおうという実態がある。そこで、固定化した見方や考え方にとらわれず、豊かな人間関係を築き、よりよい生き方について考えながらこれからの社会を生き抜いていく児童の育成のため、研究主題を「自己を見つめ、よりよい生き方について考える道徳教育の在り方」、願う児童の姿を「よりよい生き方について考え続ける子」とした。

取組初年度であった令和7年1月の、「道徳科の授業に関するアンケート」では、「道徳の授業は楽しいですか」という問いに、「楽しい」と答える児童の割合は63%という結果であった。実際の授業を見ると、自信をもって仲間に自分の考えを話せなかったり、ねらいとする価値の理解へ踏み込んで考えることができなかったりする姿が多く見られた。児童の道徳性を育み、願う姿へ向かうために、研究仮説に基づき、研究内容を次のように設定した。

<研究主題> 自己を見つめ、よりよい生き方について考える道徳教育の在り方

研究内容1 道徳科の授業の単位時間の在り方

- (1) 各指導過程におけるねらいの明確化
- (2) 過程のねらいに至るための手立ての工夫

研究内容2 全教育活動で行う道徳教育の在り方

- (1) 年間指導計画・別葉の見直しと改善
- (2) 家庭や地域との連携の在り方

2 本年度の実践

(1) 研究内容1－(1)「各指導過程におけるねらいの明確化」について

本校では、道徳科の学習指導過程の在り方を考える出発点として、各指導過程のねらいを、より一層明確にする必要があると考えた。(【表1】)道徳科の授業としてのねらいと併せて、各指導過程のねらいを明確にすることによって、固定化した手立てだけを当てはめる道徳科の授業ではなく、内容項目や目の前の児童、扱う教材によって手立てを検討するための足場とすることができる。

過程の名称	ねらい
気付く	教材の登場人物に対する自己の感じ方や考え方に気付く
深める	自己の感じ方や考え方をもとにして、教材に含まれる道徳的価値について仲間と話し合う中で、道徳的価値についての理解を深める
見つめる・つなぐ	今までよりも深められた価値観と照らし合わせて自己を見つめ、自分の生活につなぐ

【表1 各指導過程におけるねらい】

(2) 研究内容1-(2) 「過程のねらいに至るための手立ての工夫」について

各過程のねらいに迫るための手立てとして、全校研究会を通して実践してきた手立ては次の表の通りである。

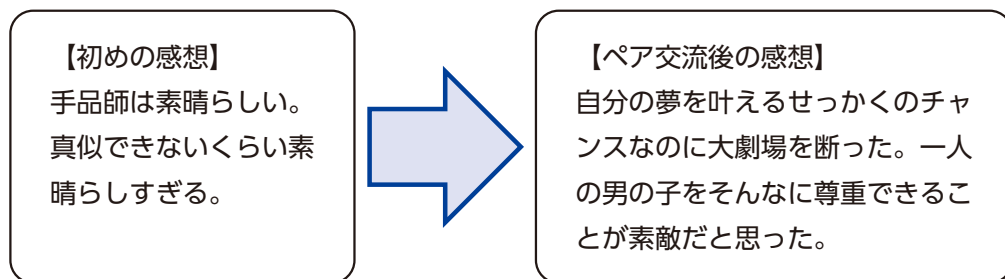
過程	気付く	深める	見つめる・つなぐ
手立ての例	<ul style="list-style-type: none"> 書く活動の位置付け 感想交流の位置付け 教材文の内容に惹きつける導入の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> 発問のもつ効果と扱う場面の検討 (ねらいに向かう発問の精選) 役割演技の位置付け 	<ul style="list-style-type: none"> 自己を見つめるための発問と書く活動の組み合わせ 道徳ノートの工夫

【表2 各指導過程におけるねらいに至るための手立ての例】

① 「気付く」の過程について

中学年や高学年を中心に、教材の範読後に、感想を書く活動を位置付ける。そして、ペアや全体で感想交流することが有効な手立ての一つであると考えている。目の前の出来事に感想をもつことができることは、自らのよりよい生き方を考える上での出発点であり、欠かせないことであると考えている。

「図1 感想交流におけるA児の発言内容の変容」にあるように、児童はこの活動を通して自己の感じ方や考え方の自覚を強めていると考える。



【図1 感想交流におけるA児の発言内容の変容】（6年生「手品師」の実践より）

低学年や特別支援学級の児童に対しては、ペープサートで内容への理解を促したり、具体物を提示したりするなど、教材への興味を高める導入をした後、教材の範読を行っている。導入において、教材の内容に関心を持ち、自分とその世界に入り込むことで、自己の感じ方や考え方に気付けるようにすることをねらった。



【写真1、2 感想を書き、交流する児童の様子】

②「深める」の過程について

自己の感じ方や考え方を明確にした児童が、どうすれば道徳的価値の理解へ向かうことができるのかを検討し、実践を進めてきた。発問については、【図2】にある通り、特に二種類の発問を「深める」の過程に位置付けることで、道徳的価値の理解を図った。

第一発問では、人物に自我関与する発問により、教材の登場人物の感じ方や考え方にこれまでよりも深く触れる。そして、第二発問では分析的に考える発問により判断の理由を問い、道徳的価値を自分との関わりで捉えられるようにすることを基本とした。

人物に自我関与する発問 (心情を問う発問)

- ・～はどんな思いだったのだろう。
- ・～はどんなことを考えていたのだろう。
- ・このときの心の中の様子はどのようだろう。

分析的に考える発問 (判断の理由を問う発問)

- ・なぜ～したのだろう(することにしたのだろう。)
- ・どんな思いから～だったのだろう。

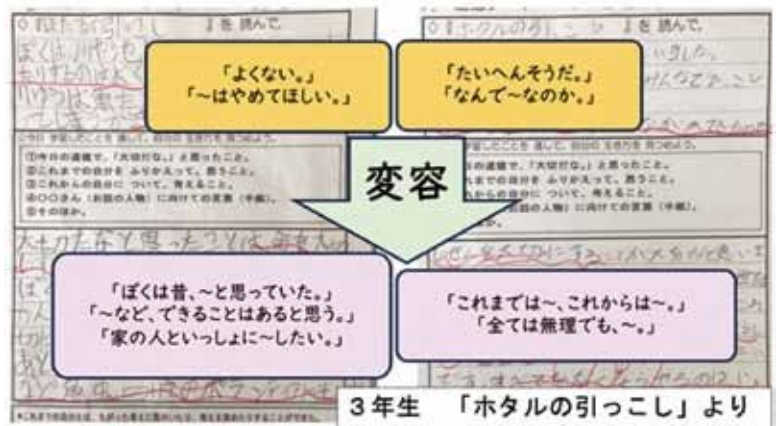
【図2 発問の種類と問いかけの例】

③「見つめる・つなぐ」の過程について

自己を見つめるための発問と書く活動を合わせて行っている実践の中で、次のような姿があった。(【図3】)

道徳ノートの記述内容を見ると、感想では批判的かつ他責的な感じ方・考え方をもっていた児童が、自己を見つめる時間では、「自分にできることは何か」を考え始めていることが分かる。教材について自我関与し、かつ、道徳的価値についての理解を自分との関わりで深めたからこそその変容であると捉えた。

また、そうした変容は、児童本人では気づきづらいからこそ、教師がその変容を見取り、伝えることによって適切な指導と評価の一体化となり、児童の道徳性の育成につながるものであると考えている。



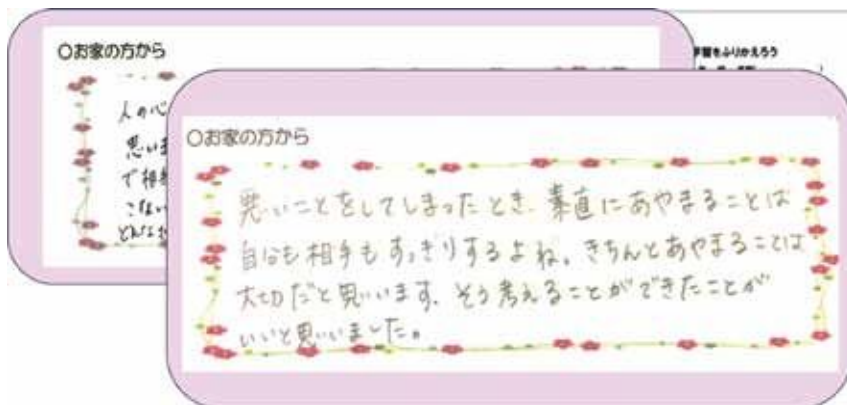
【図3 児童の記述内容の分析】

(3) 研究内容2 「全教育活動で行う道徳教育の在り方」について

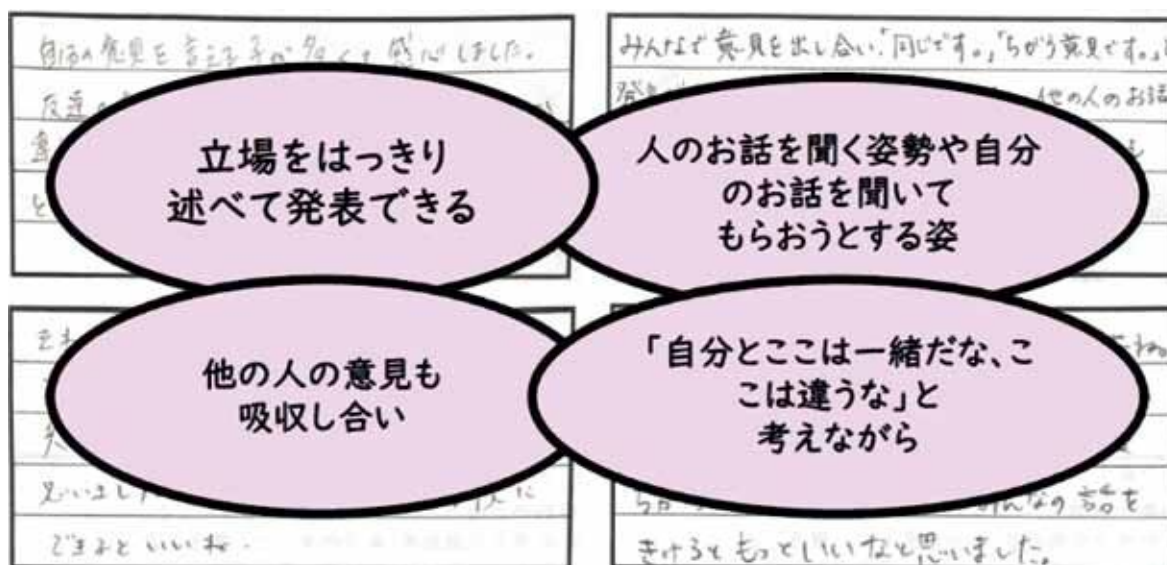
本校では、職員研修の時間を設け、別葉の見直しを行っている。本年度は特に、道徳科と地域行事とのつながりについて見直しを行った。地域行事の欄を道徳科の近くに配置すること、そして、行事ごとに、重点を置いて指導する内容項目を明記した。



また、家庭や地域との連携の在り方については、毎月末や毎学期末の道徳科の振り返り用紙の記入や、授業参観での公開などを通して、学校における道徳教育を周知する機会を設けるようにしている。授業を参観した保護者のコメントからも、本校が願う児童の姿につながる様子が、道徳科の授業内においても表れてきていることが分かった。



【図4 家庭と連携した道徳科の振り返り】



【図5 授業を参観した保護者からのコメント】

3 実践を振り返って

道徳教育パワーアップ実践事業を通して、成果と課題は次の通りである。

【成果】

- ・ 自他の意見を大切にして学ぶ姿や、他者の意見を取り入れようとする姿が見られるなど、道徳科の授業において、自己を見つめ、よりよい生き方について考える姿が見られるようになった。
- ・ 積極的な情報発信を通して、地域や家庭からの道徳教育への理解が深まった。

【課題】

- ・ 児童の実態把握が弱く、ずれたねらいを設定したり、効果的な発問を投げかけられなかったりすることで、児童が十分な話し合いや価値理解に至らなかった面が見られた。各過程のねらいを精選し、児童の実態に合わせた指導をすることで、さらに授業の質を高めていく。



(2) 関市立津保川中学校

1 研究の内容

本校では、学校の教育目標「明日を拓く たくましさ～聡明 創造 爽快～」を踏まえ、日々の教育活動を展開している。道徳教育においては、「自己を見つめる力と他を思いやる心を育てる指導」の充実に取り組んできた。

全国学力・学習状況調査における生徒質問調査などの結果から、本校の生徒は、他者のことを考えて行動しようとする傾向が高いことがわかった。また、地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う生徒が多いものの、自身の考えや地域のよさを広げ、発信することへの意識がまだ十分ではないという実態もつかめた。

このような生徒の実態から、自分のよさに気付くことや地域に支えられて生きていることを自覚することで、地域の活動に主体的に関わり、自分のこととしてとらえて地域の発展に努めようとする実践意欲と態度を育成していくことが必要であると考え、道徳教育の研究主題と研究内容を以下のように定めて実践を進めてきた。

<研究主題> 自己を見つめ、よりよい生き方をめざして実践しようとする生徒の育成 ～自己、他者、郷土の思いをつなぐ活動を通して～

研究内容1 道徳科の授業を要とし、全教育活動を通して行う道徳教育の推進

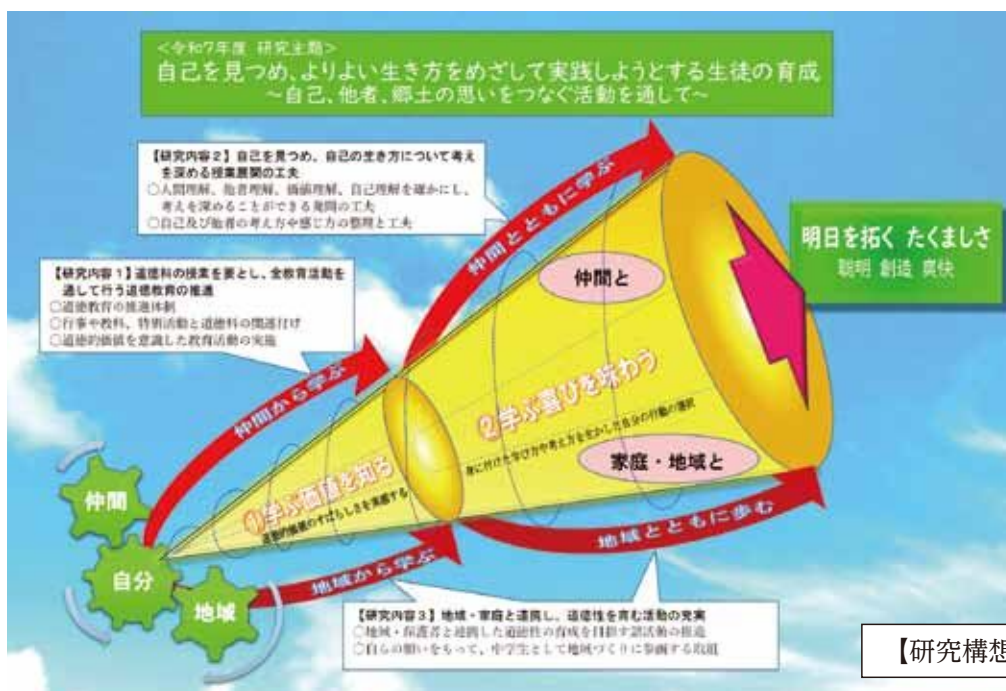
研究内容2 自己を見つめ、自己の生き方について考えを深める授業展開の工夫

研究内容3 地域・家庭と連携し、道徳性を育む活動の充実

2 本年度の実践

本校の道徳教育においては、重点項目に「生命の尊さ」「思いやり、感謝」「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」を掲げ、「自己を見つめ、よりよい生き方をめざして実践しようとする生徒の育成」の充実に取り組んできた。

本年度は、下図のように「全教育活動を通して行う道徳教育」と「道徳科の授業改善」の2つの側面から研究を進め、「生徒自らが自分や地域のよさに気づき、地域に主体的に関わっていかうとする意欲と態度につながる実践」に重点を置いて取り組んだ。



【研究構想図】

(1) 研究内容1 道徳科の授業を要とし、全教育活動を通して行う道徳教育の推進

○道徳教育の推進体制の整備

全教育活動を通して道徳教育を推進するため、「子どもが自己を見つめ、よりよい生き方をめざす実践力向上システム」の構築を図った。まず行ったのは、組織を見直し、研推長や道徳教育推進教師が中心となって実践を進めていけるように右図のように推進体制を整えたことである。また、外部講師を招聘し、研推長及び道徳教育推進教師が中心となって行った職員研修を位置付け、学校がチームで取り組んでいけるようにした。道徳科の授業では、外部講師を招聘して行った職員研修を生かし、複数教師で研修を生かした授業を実施し、生徒の変容をつかんで指導に生かせるようにした。



【外部講師を招聘した職員研修】



○行事や教科、特別活動と道徳科を関連付けた年間指導計画の見直し・修正

教科や他の教育活動、家庭・地域との関連活動等を位置付け、全教育活動を通して道徳教育を行えるように、以下の手順で道徳教育年間指導計画を作成した。

- ・ 学年部や教科担任による道徳科の授業と行事や特活、夢活、教科等の関連を踏まえた実施の検討
- ・ 学年別の道徳教育年間指導計画の作成
- ・ 学年部や教科担任による新教科書や行事を踏まえた計画内容の見直し・修正

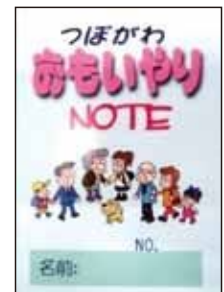
○道徳的価値を意識した教育活動の実施

①よさみつけカードの取組

「よさみつけカード」は、学年関係なく全校生徒が頑張りを認めるメッセージや感謝の言葉を贈り合う取組である。異学年からも「よさみつけカード」をもらうことで、学級の仲間同士だけでなく、より多くの人から様々な場面で認められていることを知るにつながり、自己有用感や満足感を感じることができるようになってきた。



【よさみつけカードの取組】



【つぼがわおもいやりNOTE】

②「つぼがわおもいやりNOTE」の取組

校区の小学校や地域の健全育成協議会と連携し、小中学校で「つぼがわおもいやりNOTE」を共有して活用してきた。相手のことを考えて行動したことや仲間のよさを見つけたこと、周りの人や地域のためにボランティアをしたことなどを記録することで、自らのよさに気づき、自己肯定感を高めていけるようにしている。

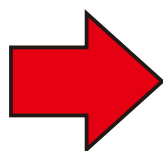
(2) 研究内容2 自己を見つめ、自己の生き方について考えを深める授業展開の工夫

○人間理解、他者理解、価値理解、自己理解を確実にし、考えを深めることができる発問の工夫

・授業構想の手順に沿った教材分析

授業を行う前に、「道徳科の授業構想」と「指導の工夫、発問の工夫」を整理してまとめ、学年部で検討するようにした。検討の際、具体的な生徒の考えや言葉を想起して道徳科の授業を構想することで、ねらいに迫るための明確な発問を考えることができるようにしている。併せて、生徒の思いを引き出し、道徳的価値の理解を深める指導の在り方について、外部指導者を招聘して職員研修を積み重ねてきた。研修を通して、より効果的な指導方法を職員全員で学び、日頃の道徳科の授業を複数担任で実施していくことで、指導力の向上を図ってきた。

授業を行う前に、「道徳科の授業構想」と「指導の工夫、発問の工夫」を作成し、学年部で検討する。



考えを深めることができる
意図的な発問

○人間理解、他者理解、価値理解、自己理解を確実にし、考えを深めることができる交流の工夫

①自己理解、他者理解のための板書の整理

道徳科の授業では、「気持ちや考え」の多様性や変容について、生徒の意見をネームプレートによって位置付け、端的な言葉で示すことで、板書を使って生徒が思考を整理できるようにした。

本校の交流 生徒が多面的・多角的にとらえて考えを深め、よりよい生き方につなげていけることを重視

- ・ a → A : 意見 a がより強い考え A に変容
- ・ a → b : 意見 a から意見 b に変容
- ・ a + a → ab : 意見 a と意見 b が合わさり ab に変容
- ・ a + a + b → c : 意見 a と意見 b が合わさり新たな意見 c に変容

など

板書の整理によって、生徒は「自己理解」及び「他者理解」をしながら考えを深めていくことができる。

授業では、ネームプレートを使って生徒の考えを位置付け、端的な言葉で板書を整理したことによって、生徒は考える際に、仲間の考えや自分のはじめの考えと比べながら左の図のように考えを深めていく。その際、教師は生徒同士の考えをつなげるような問いかけをして、交流を通して仲間の考えと比べたり、相似点や相違点を見つけたりしながら考えを変容させたり、新しい考えに至ったりして、生徒が人間理解や価値理解をしていくことができる。

【多面的・多角的にとらえて考えを深める交流】

②多面的、多角的に考える「役割演技」

考えを深めるための1つの手立てとして、交流時に役割演技を取り入れた。役割演技には様々な手法があるが、授業で取り扱う資料に合わせて多面的、多角的に考えていける方法で実施した。ある授業の役割演技では、教材にない場面を扱うことで、生徒は主人公の言葉として考えながら話した。話す言葉や様子は、その生徒の生き方や道徳的な価値観が表出される。また、役割演技を見ている生徒は、仲間がなぜその言葉や言い方をしたのか考え、考えを深めていくことができる。

役割演技 共感や実感しながら考えを深める

教材にはない場面の役割演技を行うことで、積み取った表面的な言葉ではなく、より深く考えながら、主人公の言葉として自分の考えを話すことができるよ。

仲間がなぜその言葉や言い方をしているのか感じ取って、「そういう考えもあるのか」「自分だったら～」と共感や実感しながら自分の考えを深めていけるよ。

【多面的、多角的に考える「役割演技」】

(3) 研究内容3 地域・家庭と連携し、道徳性を育む活動の充実

○自らの願いをもって、中学生として地域づくりに参画する夢活やボランティア

①地域から学び、地域について考え、発信する夢活の実施

本校では、総合的な学習の時間を「夢活（ゆめかつ）」と呼んで取り組んでいる。夢活では、地域で働く職場体験や地域を支える方を外部講師に迎えて学ぶ機会を通して、地域のために自分たちにできることを考え、夢や希望

をもって将来につなげていけるように学習している。

具体的には、体験を通して地域について考える学習、地域で活躍している方から話を聞いて考える学習、地域の中で実際に活動して考える学習など、様々な形で地域と関わりながら考える学習を行っている。体験を通して地域について考える学習では、自然との共生について地元の津保川漁業協同組合の方と考える「鮎釣り体験」、森林組合や農林事務所、林業育成指導員会の方から学ぶ「森林教室」のように、体験を通して地域の人と関わりながら自分たちの地域における生活と自然との関係について考えた。



【自然と生活のつながりを学ぶ森林教室】

他にも、地域で活躍している方から話を聞いて考える「職業講話」、地域で生徒自身が働く「職場体験」、地域の赤ちゃんやその母親と触れ合う中で命について考える「赤ちゃんふれあい体験」や地域の診療所の先生や保健師の方から学ぶ「いのちの授業」、地域で学び、支えられたことへの感謝を伝える「武儀・上之保のつどい」などを行い、地域と共に活動し、地域から学び、地域に伝えながら、夢や希望をもって主体的に地域づくりに参画しているようにしている。

②地域・保護者と協働して道徳性の育成を目指す諸活動の推進

地域・家庭と連携して道徳性の育成を目指す活動として、挨拶を柱とした活動を行った。挨拶活動は、有志の生徒が集まって結成している「MSJリーダーズ」の挨拶の取組や青少年健全育成協議会など地域の方と一緒に挨拶、校区の小学校に行ったりスクールバスで迎えたりして行う挨拶など、挨拶を通して心をつないでいけるようにした。その他にも、1家庭1ボランティア運動の取組のように、家庭の中でも道徳性を育むことができる取組も行った。1家庭1ボランティア運動の取組を通して、家族の一員としての自覚や感謝の心を持ち、自分から行動していこうとする意欲につながっていった。

③自らの願いをもって、中学生として地域づくりに参画する取組

学校で学んだり、取り組んだりしてきたことを生徒の実践につなげていけるように、地域行事を紹介し、ボランティアに参加できるように地域と連携を図っている。地域ボランティアでは、武儀や上之保の生涯学習センターで行うイベントの企画・運営や地域行事で運営のお手伝いをするなど、ボランティアスタッフとして、率先して参加する生徒が増えてきている。課題としてとらえていた、地域との関わりについても、地域を知り、地域と共に活動していくことで、地域のために考え、行動しようとする生徒の育成につながってきているといえる。身近な地域との関わりを通して、生徒自身の生き方や人生を豊かなものにし、人も自然も豊かな地域を大切にする心を育めるようにしている。

3 実践を振り返って

2年間の研究実践では、「学習指導要領を踏まえた道徳教育の充実」と「学校、家庭、地域社会が連携した道徳性を育む実践の充実」の2点を中心に取り組んできた。また、学校教育全体で道徳教育を推進するために、外部指導者を招聘して職員研修を行ったり、道徳性を育むための活動を充実させたりすることで、道徳教育を核としたカリキュラム・マネジメントを進めてきた。日々の道徳科の授業においても、授業のねらいに迫るための具体的な手立てを学び、道徳科の授業を構想し、職員全員で共通理解を図っていくことで、教師の指導力を向上させてきた。



【道徳科の授業で行う「役割演技」】

本研究を通して、道徳教育の充実、教師の指導力の向上、道徳科の授業の質の向上を図るとともに、生徒の自己有用感や地域での活動の意識を高めていくことができた。また、道徳教育を推進していく中で、地域や家庭と連携を図った活動や取組を整理し、学校と地域・家庭が協働した教育活動を行えるようにしてきた。今後も学校と地域・家庭とが協働し、持続可能な道徳教育や地域活動を進めていくことで、生徒が自らの夢を切り拓く力を身に付けるとともに、地域社会の中で活躍できる資質・能力を育んでいきたい。

情報提供

(1) 文部科学省 「道徳教育アーカイブ」



文部科学省「道徳教育アーカイブ」URL : <https://doutoku.mext.go.jp/>

(2) 岐阜県教育委員会HP「ぎふっこ学び応援サイト」 『豊かな心を育む』（教員用のページ内）



2次元コード



岐阜県教育委員会HP「ぎふっこ学び応援サイト」
URL : <https://www.pref.gifu.lg.jp/page/191743.html>

『心がつながる』

ボランティア運動

あたたかい心や笑顔、
「ありがとう」の気持ちは、
人とのつながりをつくり出します。

夢

希望

“あたたかい心”をはぐくむ活動の全てが、
「1家庭1ボランティア」の取組です。

取組を通して、
人とのつながりの中で「自己有用感」を高め、
「命の大切さ」を知り、「夢や希望」を育てていきます。

命

あなたの行動が、
あたたかい心や笑顔を広げます。
家庭に、学校に、職場に、みんなの住む町に。

「1家庭1ボランティア」運動は、

豊かな心と行動に満ちあふれた県民風土をつくることを願って進めている県民運動

- 家族と一緒にごみ拾い
- 学校でのあいさつ活動や花づくり
- 友達と協力して地域行事の準備 など

自分から進んで取り組み、声をかけ合い、応え合い、「ありがとう」の気持ちを伝え合いましょう。

令和7年度 岐阜県 道德教育指導資料

令和8年3月発行

編集発行 岐阜県教育委員会 義務教育課

〒500-8570 岐阜県岐阜市藪田南2-1-1

TEL 058-272-1111 (代表)
